

# 欠

いふ意味からも大きく世界的規模の計畫化が必要になつて來る。更にもう一つ重要な變化を附加へれば労働の地位の著るしい進出といふ問題である。之は前の大戦中にも見られた所であるが、特に今度の大戦を通じて著るしく現はれた。そこで失業乃至完全雇傭の問題は新しい社會的重要性を帯びて登場するやうになつたのであるが、それが戦後の經濟的不安と結びついて社會主義的計畫化を促進する決定的な要因となつたのである。

### 3 これが理論經濟學に如何に影響するか

經濟が變化するに伴つて經濟思想が變化するといふ事は上述した通りであるが、それと共に理論經濟學も亦變化するだらうかといふのが次の問題である。勿論一口に理論經濟學の變化と言つても、色々な意味がある。

第一はその本質の變化といふことであり、第二は内容の變化、第三は方法論の變化といふ意味である。(之等の内第二と第三とは廣い意味での内容の變化である。) 之

の立入つた説明は後に譲る事として、此所では唯序論的な程度に止めておく方が便利である。

經濟の變化に伴つて

- 一、理論經濟學の科學としての本質は變化しない。
- 二、然し内容は變化する。
- 三、同時に方法論も亦變化する。

理論經濟學は前にも述べたやうにポジティブ・サイエンス即ち實證科學であるからその對象とする現實の經濟現象が變れば當然それに伴つて變らねばならない。然し此際變るといふのは内容なり方法論なりの事であり、理論經濟學の科學としての本質が變るといふのではない。理論經濟學は經濟現象の理論的、統一的な説明原理を與へるといふ所にある。例へば需要が供給に一致するのは如何なる過程を通じてか。價格と生産費と一致するのは如何なる原則によるか。或は獨占到於ける生産量なり價格なりは如何に定まるか。利子とか賃銀とかは如何なる法則によつて定まるか。この様な

經濟法則を見出すといふ事、換言すれば現實の經濟現象を統一的に説明する原理を與へるといふのが理論經濟學の本質である。之が同時に理論經濟學がポジティブ・サイエンスであるとされる以所である。

理論經濟學が本質的にはこの様な科學であるといふ事自體は、如何に經濟が變化しても變る事がない。此様なポジティブ・サンサンズとしての經濟學がノルマティブ・サイエンスに變る。例へば現在の經濟組織は倫理的に非難さる可きものであると考へ、之れを倫理的な觀點からあれこれの組織に變へなければならぬ、或は變る可きものであると言ふ風な性格のもの、このやうな本質的に全く異つた學問に變るものとは考へられない。

此様な意味に於て理論經濟學の本質は變らないであらうが、その内に盛られる内容は經濟の變化に伴つて、或時は徐々に、或時は急激に變化すると言はねばならぬ。前にも述べたやうに大きく且つ急激に經濟の變化を示しつゝある今日及び近い將來に限定して考へるとすれば、理論經濟學の内容にも大きい變化が起つて新しい形態の經濟

學が形成されるに違ない。既述のやうに、そして尙詳細に立入つて後述するやうに、第二次大戦後の經濟には計畫經濟の要素が強くなり込んで来る。その様な變化に應じて計畫經濟の理論が今後急速に成熟して来るものと思はれるが、之を從來の理論經濟學が如何に受入れるかといふ事が問題である。

例へば統制價格の理論が形成されるとする。從來の理論經濟學の價格理論は自由價格の理論であるが、之に統制價格の理論を受入れるとすると此所に價格理論は内容的に大きく變化するといふ事になる。さうすると價格と生産費従つて供給との關係、従つて又需要と供給との關係に關する理論にも内容的に變化が起つて来るわけである。更にもう一つの例を挙げるならば、労働時間とか最低賃銀とか其他の労働條件が計畫的に定められ、又労働の移動といふやうな事も國全體の立場から統制されるといふ事になる。他方資本の投資も同じ立場から計畫化されるとする。此場合、自由價格の法則によつて労働の供給なり、賃銀なり、利子或は利潤なり、生産量なりの決定を説明するといふ理論經濟學だけでは現實としての現象の説明原理を與へたといふ事は出来

ない。かうして計畫經濟の理論の發展に伴つて理論經濟學の内容が變化し且つ豊富になつて行くだらう。之れは經濟學が實證科學であるといふ本質上當然の事と言はねばならぬ。

經濟學の内容が變るといふ事のもう一つの意味は、今後の經濟學は統計的研究を理論に攝取するといふ事である。經濟の計畫化は統計的實證的研究を基礎としなければならぬ。現實の動きが事實によつて數量的に明かにされない限り計畫を立てる事は出来ないし、又計畫の結果を知る事も、従つてその修正も出来ない。處が經濟の實態は唯統計的實證的研究によつてしか知る事が出来ない。統計的研究と計畫經濟との間が此様に密接に接び付いて居るといふ所から、此部門の研究の盛んになつたのは經濟の計畫化乃至統制經濟の必要が感じられるやうになつてからの事である。アメリカに統制經濟の行はれたのは第一次大戦後の事であるが、それに伴つて經濟學の中に統計的研究が深く入つて来るやうになつた。ミッチェル等の景氣變動に關する研究の如きものを經濟學に結び付けるといふ目的を以つてアメリカに景氣研究所が出来たのが一九

二〇年から二五年、ドイツにベルリン景氣研究所が出来たのも二五年である。一九二三年には日本で三菱經濟研究所が出来て居る。之等は何れも戦後の實證的計畫化乃至統制化の要求に結び付いたものと言ふ事が出来る。

その後はアメリカを中心に統制經濟の傾向が強くなるに従つて此部門の研究の發展に顯著なものがあつた。非常に大膽且つ徹底的な研究方法を採つて來た。特に第二次大戦中、戦時計畫經濟の要求と結付いて急速な進歩を見たやうである。

スモール・サンプルの理論が進歩して之を經濟現象に應用し得るやうになつたが如きはその一つの例である。此方法は元來主として自然科學の統計的研究に用ひられて居たのであり、經濟方面ではせいせい生産管理等に應用されて居たに止まつて居た。それが現在では國民經濟的問題にも此方法が使はれて居る。例へば賃銀問題にも盛んに用ひられて居るし、租税と生産との社會的研究といふやうな廣範な問題にも此スモール・サンプルの理論が應用された。

此様な傾向はアメリカ許りの問題ではない。計畫經濟的要求の一番強いソ聯では元來統計を非常に重視して居るし、計畫的要素が近年段々強くなつて來たイギリス、スウェーデン等に於ても最近には理論と結付いた多くの統計的業績を示すやうになつた。

此様に統計的研究が計畫經濟に可能性を與へ、その理論と實踐との基礎となり、此計畫經濟の理論が從來の理論經濟學に取り入れられ、その内容を豊富にし變化せしめる。この關係を通じて、統計的研究の發展が理論經濟學の變化と發展とに關聯を持つばかりではなく、更に直接的に統計的研究そのものが理論經濟學によつて攝取される事になる。此様な仕事は既に相當の程度迄進んで來て居るのであるが、今日迄の處理論經濟學はまだ質的經濟理論の領域に止まつて居ると言はねばならぬ。一八九七年既にマーシャルが質的經濟學から量的經濟學に變化しなければならぬと述べて居る。

此様な變化は、一方に於て統計的研究そのもの、發展を前提とするのであるが、計畫經濟の理論を理論經濟學に收容れるといふ事は、同時に理論經濟學が統計的研究をも亦攝取する事によつて量的經濟理論に發展する事を意味しなければならぬ。

理論經濟學は以上の意味に於て内容的な變化を示すと思はれるのであるが、同時に方法論の上にも大きい變化が起るものと考へられる。此點は尙後に詳細に述べるのであるが、從來の原子論的、ミクロ・コスミック（微視的）な立場に立つて居た理論經濟學も、經濟の計畫化社會主義化が前面に出て來るに伴つてマクロ・コスミック（巨視的）な立場をも受け入れて、之等二つの立場を綜合する様になつて來る。或は此二つの立場が種々な意味の交渉を持つ様になつて來る。此問題に就てはIV並にVに亘つて述べられる所の、多方面の觀點からの討議に就て見られたい。唯此所では次の點だけを述べておけば充分である。

ミクロ・コスミックな立場は經濟世界を無數の個の集計であり、且つ與へられた、人間の力を以つては動かすことの出來ない一つの有機體と考へる所に成立する。従つて此立場にある理論經濟學は此世界を構成する所の原子即ち個を分析することによつて此世界の運動法則を見出さうとする。處が此世界は動かし得ない世界であるから、此場合の運動法則は一つのメカニズムとしての經濟世界の内に、色々な經濟現象間の

相關々係として現はれるわけである。處が經濟が計畫化、社會主義化される様になるといふ事は、既に經濟的世界觀に大きい變化の起つた事を意味して居る。經濟は動かし得ないメカニズムではなく、吾々が何等かの方法によつて動かす事が出来るものだといふ見方に變つて居るわけである。此様な經濟觀に立つて經濟を計畫化しようとするれば、國民經濟の全體を掴むことが必要であり、全體としての立場から構造分析を行はなければならぬ。同時に之によつて、現在の價格とか、生産とか、賃銀とか、利子とかいふやうな經濟現象の社會的意味を追究する必要がある。此様な立場の分析が、マクロ・コスミックな立場である。逆に此立場による分析が發展するものでなければ、經濟の計畫化の可能性が出て來ないといふ意味に於て、理論經濟學に於ける此方法論上の變化が計畫經濟化の理論の展開と實踐の促進とをもたらすといふ關係も認められる。

### III 資本主義經濟は何、うなるか

#### 1 經濟學の將來と資本主義の將來

以上述べた所によつて、經濟學が何う變るかといふ事は資本主義經濟がどう變るかによつて決定的な影響を受けるといふ事が明かにされる。現に自由經濟を原則とする資本主義に計畫的要素が強くなるといふ事によつて、經濟學の上に既述の様な變化が豫想される。そこで先づ資本主義經濟は、第二次世界大戰といふ大きい事件を経過した所の今後何うなつて行くだらうかを問題にして見る必要がある。

現在、色々異つた程度に於てはあがあるが、統制經濟乃至計畫經濟が何れの國に於ても行はれて居るのであるが、資本主義經濟の將來といふ問題は唯これだけの事實によつて説明されて居るわけではない。見方によつては、戦後の復興がこれから五年なり十年なりの内に完成されるとすれば、再び自由經濟に歸るといふ考方も成立たないで

はないだらうし、或は計畫的要素を取り入れた資本主義經濟が之から相當長い期間に亘つて續くといふ考方もあり得る。或は計畫經濟はその儘社會主義經濟に移り變る道順だといふ考方も成立し得る。

この様に資本主義經濟が今後どうなるかといふ點に就て色々の見方があり得る如く、經濟學の將來に就ても亦多くの見方があり得るだらう。そこで經濟學の將來といふ問題に深く入るより前に、その準備といふ意味に於て先づ資本主義經濟の將來に就て考へて見るわけである。勿論此問題に決定的な解答を與へるといふ事は不可能に近い程困難で複雑であり、懇談會に於ても一致した結論に到達する事が出来なかつた。問題の性質上これは當然と言はねばならぬ。然し懇談會の内容は非常に示唆的であり、之れを獨立に切離しても誠に興味深い問題であると思はれた。

#### 2 資本主義經濟と完全雇傭

此處で資本主義が何うなるかの問題を、現在吾々の當面して居る實際問題の解決策

を通じて考へて見るのが便利だと思ふ。例へば世界各國を襲つて居るインフレーションの問題とか、戦後世界的に起りつゝある失業問題とか、之等は何れも結局資本主義經濟の根本に觸れなければ解決されない問題である。従つて此様な問題を處理して行かうとすれば何れ資本主義經濟は行く可き所に行かなければならない。例へば修正された資本主義とか、社會主義とか何所かに行かねば納まらぬ問題である。その様な意味から一つの重要な實際問題を撰んで問題に迫つて行くわけである。

こゝでは失業問題を選択した。トルーマン大統領は第二次世界大戦後の世界經濟の目標を完全雇傭の實現といふ點において居る。イギリスに於ても國民に勞働する權利を認めようとする考方が強くなつて居るし、我國の新しい憲法草案にも國民の勞働權が認められて居る。此様に完全雇傭が國家の最高目標に掲げられて居る一方、失業の大量發生といふ危険性は至る所に迫つて居るのである。そこで此困難な、然し解決しなければならぬ問題を中心として資本主義の今後の行衛を考へて見る。

(ビヴァリッチの完全雇傭論)

此所で一應ビヴァリッチの完全雇傭に關する考方を述べて問題の緒口にしよう。完全雇傭の問題は結局資本主義か社會主義かといふ根本問題に觸れねばならぬ事になるのであるが、彼は之には觸れないで問題に入つて行く事が出来ると述べて居る。何故ならば社會主義體制に移らうとも、或は資本主義體制が此儘で續かうとも、何れにしても完全雇傭を實現しようとするれば彼の主張する提案は實行されねばならないからである。かういふ意味から資本主義か社會主義かといふ問題を避け乍ら一つの提案をして居るのである。

彼の完全雇傭の提案は

- 一、國家は國民に勞働の機會を與へる義務があるといふ前提の下に
  - 二、且つ國民の自由を確保するといふ條件の下に完全雇傭を實現する爲には
  - 三、國家はその強大な權力によつて需要の社會化を行ひ、失業勞働を完全に吸収し得るだけの需要を維持する必要があるといふのである。
- 一 元來完全雇傭乃至失業の問題を考へる前提として二つの立場がある。その一つ

は國民には勞働權があるといふ立場である。國民には總て勞働する權利が與へられて居るものとすれば國家は何等かの方策を以つて勞働の機會を與へる義務がある。従つていつでも完全雇傭の状態にあるやうな態勢においておくといふのは國家の採らねばならぬ義務だといふ事になる。第二の立場は此様な勞働權といふやうな見地から出發するのではなくして、自由經濟に於けると同様に、企業の利潤追求に任かしておく。即ち企業が自由に利潤追及の立場から必要とする勞働を雇傭して行く。さうすれば、完全雇傭の状態になる場合もあれば大量の失業者の出て来る場合もある。かうして失業者が出た時には國家が出て来てその失業を救済する。結局自由企業から起つて来る弊害を、後から國家が負擔して行くといふ立場である。

ビヴァリッチの場合には右の二つの内第一の立場をとるのであり、完全雇傭を確保するといふ事は國家の義務だと考へて居る。(我國の新憲法も國民の勞働權をハッキリ認めて居るといふ事を顧る必要がある。)そこで、資本主義體制が當然大きく變革を上げて来て社會主義化して行かねばならないと考へるべきポイントがあるのだが、此點

は尙後に述べよう。

二 以上の様に國民の勞働權を認容してかゝると同時に、他面ビヴァリッチは人間の自由は飽く迄も確保しなければならないと考へる。彼によれば、完全雇傭よりも寧ろもつと根本的なものは自由を確保するといふ事であり、此自由に對する慾求を犠牲にしても好いといふのなら完全雇傭といふやうな理想に到達する事は容易に出来る問題である。然しイギリスとしての問題は、自由を確保するといふ條件の上での完全雇傭の實現といふのであり、自由を拘束するが如き計畫化には同意する事は出来ないといつて居る。

それでは此場合彼の言ふ自由といふのは、具體的には何を意味して居るかと言ふと先づ人間の根本的權利としての自由、市民の自由であり、例へば信教の自由、言論の自由、出版集會の自由、かういふものから更に經濟的自由としては、利潤追求の爲に資本を用ひる自由、職業選擇の自由、消費の自由等を列擧して居る。

此の様な自由を確保する線を絶対に守りたいといふ所に、彼の問題解決の提案を非



常に苦しいものにして居るのであるが、此點も亦後に觸れる事とする。

一九二

三 以上の様な前提と條件との下に完全雇傭を實現する爲の提案をして居るわけである。ピヴァリッチの見るところによると、失業の最も大きい原因は、ケインズの分析によつて明かにされた様に、需要の不足である。此需要の不足が失業の最大原因であるといふ事、別の側面から言へば需要さへ増加し得るならばそれによつて社會の生産活動が充分に維持され、失業の發生は防止し得るといふ事、之が彼の完全雇傭論の基礎である。現に大戰中に現はれた完全雇傭の状態といふものは、國家の需要が無制限的に大きかつたといふ事實に基くのである。

處が全國民に何時でも勞働の機會を與へ得る程の有効需要を不斷に造り出すことの出来るのは國家を措いて外にはない。だから國家は財政に對する從來の考方を放棄して、公債とか租税とかの手段によつて必要な限りの資金を調達し、之を支出する事によつて生産物に對する有効需要を、完全雇傭の實現し得る程度に維持しなければならぬ。此程度の有効需要は國家の強大な力を以つてすれば充分可能であり、戰爭中は現

に之れが行はれてをり、之を唯平和的目的におき換へるに過ぎない。

唯此場合と雖も極度に大きい需要の不足を國家の需要によつて補ふといふ事になれば問題だが、ピヴァリッチの分析によると大體國民所得の一割内外の需要を國家が補ふ事で目的を達し得ると考へて居る。一九四〇年位迄のイギリスの國民所得は、一九三八年の物價水準で測ると五十億磅乃至六十億磅と計算して居るが、それに對して約五億磅の需要が造り出されるならば當時存在した失業は全部雇傭される事になる。つまり恰度五億磅に相當するだけの需要が不足して居た爲めにそれに應じるだけの失業があつた。そこで逆に五億磅の所得増加をなし得るだけ國家が支出を行ふと言ふ事になれば完全雇傭の状態を實現することが出来るといふのである。

此提案をして居る中で、今迄資本主義經濟の中で考へられた各種の失業對策を擧げて批判して居るのであるが、その一つとして私的投資の調整を擧げて居る。例へば不景氣の爲に失業者が増加する場合には、利率を引下げるとか、國家が産業に補助金を與へるとか、或は租税の輕減免除を行ふとかの方法によつて投資を刺激し、之を通じ

一九三

て失業を克服すると云ふ對策である。然し之は飽く迄も景氣變動の對策であつて、此意味の失業對策では完全雇傭を實現する事は出來ない。何故かと言へば、景氣變動に於ける好況の頂點に於てさへも失業率は尙相當高い。それ許りではなく、好況の頂點といふものはいつでも前の不況の反動として起るのであるから、此反動として起る好況の頂點を常態として持續せしめるといふ事は此様な私的投資の獎勵策では出來るものではない。結局景氣對策としての失業對策では、景氣の山と谷との平均線の程度にしか失業を克服する力がないのであるから、これでは失業といふ負擔を常に社會が背負つて進んで行くといふ事にならざるを得ない。之に對して彼の提案は最初から失業を最少限度に減少する事を目標にして、完全雇傭を實現するに充分な有効需要を維持するに足るだけの支出をなさしめるといふ所にある。従つて此提案は景氣對策的の失業克服策ではないといつて居る。

尙失業の原因としては副次的なものではあるが、労働の移動性、労働市場の組織化といふ問題もある。労働市場を調整するには結局労働組合を中心にして労働側との完

全な諒解が必要である。労働者の生活水準引上の要求の如きものも全體的に統制して圓滑に進展する道を開かねばならない。他方資本側の協力を得ると共に資本の方にも調整を加へる必要もある。此様な調整も完全雇傭を實現する爲めには必要であるが、之等も従來の儘の自由經濟の體制では出來ない事であり、やはり國家の強大な力を導入して來なければならぬ。

(資本主義か社會主義か)

ビヴァリッチの完全雇傭に對する提案の骨子は太體以上様なものである。此提案を考へて行くと資本主義の將來に就て色々な暗示が與へられるのであるが、此處で一應、彼の提案は大體現在の資本主義體制を社會主義に持つて行かうとするのか何うかといふ點を明にしておく必要がある。ビヴァリッチ自體は、前にも述べたやうに、資本主義か社會主義かといふ問題を回避して、一應資本主義の枠の内で完全雇傭の問題を解決しようとして居る。此點に就て彼はかういふ風に述べて居る。大體資本主義か社會主義かといふ様な問題は完全雇傭の問題だけから論じられるものではなく、外に

澤山の論點を含んで居るのであるが、吾々は今之等に立入る必要がない。今此問題に立入らなくても、その立場如何に拘らず之だけは必要だといふ事を述べたに過ぎない。更に又此様にも述べて居る。完全雇傭の問題は生産手段の國有化といふやうな社會主義體制をとらないでも解決の出来る問題だ。然し此自分の提案は一つの考方であるから實際にやつて見た場合、果して之でうまく行くかどうかは判らない。然しこれは謂はゞ次の曲り角の問題で、吾々はまだその曲り角迄行つて居ない。だから兎に角その曲り角迄行つて見るのが今のイギリスの問題で、それから後にどういふ景色が展開されて来るかは次の段階に譲つていゝ問題だと思ふ。

つまり彼は、イギリスの場合は一應社會主義體制をとらなくても、彼の提案によつて資本主義の枠内で失業問題は充分解決されるのであるから、資本主義か社會主義かといふやうな廣範な問題に入る必要はない。然しそれを實際やつて行く内に、社會主義化しなければならぬ事になるかも知れないが、それは後の問題だといふのである。彼はかうして資本主義か社會主義かの問題を回避して居るのであるが、然し彼の

上述したやうな提案自體が既に此問題を充分含んで居るといふ事が出来る。特にイギリスといふ特定の國を離れて世界の問題として此提案を見る場合は尙更此點が重要な問題となつて来る。

先づ彼の提案の前提になつて居る第一の點、國家は國民に勞働の機會を保證する義務があるといふ所に問題がある。國家が此義務を果す爲めに完全雇傭を維持するに足るだけの國家支出を續ける必要があるといふのがピヴァリッチの考であるが、その場合一方私營企業の自由が残されて居り乍ら他方國家の投資分は段々増加して行く。公有企業の範疇も擴大されて来る。更に勞働組合運動に就ても國家との間に調整が行れて行くし、特に賃銀を完全雇傭と兩立せしめる爲には強力な價格統制をやらねばならぬ。かうして見ると國家が國民に對して負擔する義務を果す爲には經濟全體に對する統制が強化し、計畫化の要素が益々強くならざるを得ない。それでも尙資本主義的體制と言ひ得るかどうかといふ事が問題である。

更に彼は需要の社會化、即ち國家が巨大な需要者となる事によつて失業者の發生を

防止する事が出来ると説く。別に生産の社會化、即ち企業の公有を行はなくとも目的を達する事が出来る。例へば今度の大戰に於て見られた様に、需要の社會化が相當大規模に行はれ、それに應じて労働の調整も行はれた。然し生産の方は必ずしも社會化されたわけではない。而も戰爭中は明かに完全雇傭の状態にあつた。然し他方、かういふ彼の考方に對して需要の社會化が大規模に行はれるやうになれば、それに伴つて生産の社會化も大規模にならざるを得ない。その結果は經濟の全面的計畫化、社會主義化を免れる事は不可能だといふ議論もあり得る。

此點に關聯して彼の置いた條件、自由の維持といふのが彼の考方を非常に苦しいものにして居るやうである。資本の自由、労働の自由、消費の自由、その他人間としての根本的な自由は絶対に維持しなければならない。此自由の維持を犠牲にする程に失業問題は重要な問題ではない。かういふ制限をおくとすれば、たとへ資本主義經濟が彼の提案によつて色々な面から修正され、計畫的要素が強くなるにしても尙社會主義化を避けようとする意圖、乃至避けなければならぬといふ信念が窺はれる。

かうしてピヴァリッチは資本主義經濟の内で、資本主義の基本原則を侵さずして失業問題を解決しようとするのであるが、それは結局特定の國、イギリスに於ける解決策だといふ事が出来る。之はイギリスに限らずアメリカの場合も同様であつて、富の蓄積が非常に進んでをり、生産力も高度に發展して居るといふやうな所では、彼の提案には可能性が認められるだらう。さういふ段階に達して居る國では、國民所得の或一小部分、資本の擧げ得る利潤の或部分だけを國家に吸収すれば、それで問題が比較的容易に解決出来る。その場合には投資の自由、資本の利潤追及の自由を僅かに制限するに止まる事が出来るだらう。處が生産力の發展の程度が低く、従つて富の蓄積が少い國、例へば日本の様な場合になると、國家の必要とする資本が國民所得の非常に大きい部分に喰込んで来る。即ち富の程度と失業の量とを比較して見て、國家が喰込まねばならぬ資本の割合が非常に大きいと言ふ場合は資本の自由が益々制限されて来る。そこに國有企業の領域が益々大きくなつて来て、結局は社會主義體制に移らねばならぬといふ事になる。

さう考へて見ると、イギリスとかアメリカといふ様に生産力の發展段階が高く、富の蓄積も多いといふ所では、資本の比較的小部分だけを國家に委ねる事によつて完全雇傭の理想を實現する事が出来る。勿論此場合と雖も上述した様に色々な面に統制が強化されるであらうし、計畫化の要素が強くて來るのであるが、それでも尙資本主義に許された自由の原則は基本的には維持されてをり、資本主義經濟の基本原則は保たれて行くだらう。つまり計畫化された資本主義で解決されて行くわけである。唯此際にも一應はそれで片付くかも知れないがやはりそこには限度があるのでないかとも言へる。此點に就てはビヅアリッチ自身も認めてゐる所であつて、自分の提案は曾つて一度も實行された事がなく、資本主義の枠の内で完全に解決されるといふ立證がないのであるから之は一つの冒險である。又之が國家の力で出来るか出来ないかといふ見透しが完全につかないといふ意味でも冒險である。然し此問題は解決しなければ全滅するかも知れないのだから、どうしてもやつて見なければならぬ冒險であり、それに対する信念を持つ必要があると述べてゐる。

此様なイギリスとかアメリカ等と比較して生産力も低く富の蓄積も少いといふ様な國、例へば日本の場合等では、資本の非常に大きい割合を國家に委ねる事が必要となつて來る。さうすると資本の自由は急速に失はれて行くであらうし、經濟に對する計畫化は全面的となつて完全に社會主義化する事とならざるを得ない。結局一つの提案を實行に移すといふ段になれば、既に高度に資本主義の發展した國であれば計畫的資本主義が少くとも或處迄は維持されるのであるが、さうでない國は急速に社會主義經濟に移らねばならぬといふ事になる。

### 3 日本資本主義の將來

以上の様に資本主義經濟の發展の段階が異なるに従つて問題解決の方式が異り、計畫的資本主義を以つて少くとも一應の解決が可能な國と社會主義體制をとらねば解決のつかない國とがある。さうするとさしづめ日本の資本主義の將來は何うなるだらうか。現在失業問題とかインフレーションとか、解決しなければならぬ大きい問題が

追つて居るわけである。之を根本的に解決して行かうとすれば、何れ自由經濟に復歸することは出来ないとして、一體どういふ原理に立場を求む可きであらうか。我國の資本主義の將來は此場合に擇ばれる原理の如何によつて大きく違つて來る。

(需要の原理と生産力の原理)

今述べて來たビヴァリッチの提案は需要の原理によつて完全雇傭の問題を解決しようといふのである。勿論此立場も問題は結局に於て生産力によつて解決されるといふ事を否定するものではなく、却つて生産力を増大せしめるが爲めの徑路として需要の原理の立場を採るのである。

ビヴァリッチは彼の提案の論證の内に歴史的 analysis を行つて居るが、そこでもし終始完全雇傭の状態が続いて居たと假定した場合、イギリスの富がどれだけ増加して居たであらうかを推計して居る。此様な分析の行はれるのは、雇傭の問題は結局生産力の問題だといふ事を自覺して居るからである。その生産力の問題を解決するには需要の原理から行かねばならぬと考へた。元來此原理を提供したのはケインズで、ケイン

ズの出で來る迄は失業問題を産業の問題として解決しようとして居た。然しこれでは結局行詰らざるを得ない。そこでこれを他の側面、需要の面から進むことによつて遂に問題を原理的に解き得たといふ過程を経て居る。ビヴァリッチの提案は此點ケインズの理論に立脚するのである。

生産力の發展が需要即ち市場機構を媒介とせずしてはあり得ないといふ事は、アダム・スミスの國富論にも極めて明瞭に現はれる處である。例へばその内の分業による生産力の發展といふ考方、これは市場を媒介とした生産力の發展である。職業的分業は勿論市場の媒介なしには考へ得られないし、工場内の分業ですら同様に市場の媒介に強く影響を受けて居ると言はねばならない。

かう考へて來ると、需要を大きくすることによつて労働者の總てに労働の機會を興へるといふ、需要の原理に立つビヴァリッチの立論は、結局需要自體、市場自體を問題とするのではなく、それを媒介として生産力を發展せしめ、それを通じて常態的完全雇傭を實現せむとする所にその意味があると見られるだらう。

此様な需要の原理の主張に對立して生産力の原理が主張される。需要の原理によつて資本主義の矛盾、例へば失業といふ問題を解決しようとするれば必ず或所で行詰るに相違ない。問題は結局生産力に歸着するのであるが、需要の原理によるよりも、生産力の原理によつて經濟の根本的立直し、編制替をやつた方が生産力はより遙かに大きくなる。従つて需要の原理に立つ國は、生産力の原理によつて再編制された國によつて追ひ越され、國際的に非常に弱い立場に追ひ込まれるといふ大きい弱點を持つて居る。生産力の原理に立つ國は、生産力の發展そのものを目標として生産組織を新たに再編制し、増大して行く年々の生産そのものが失業を生まない様な組織を組立てる。だから失業對策といふ觀點から見ても此方が遙かに徹底的であり合理的であり、従つて行詰るといふ事がない。

なる程アダム・スミスの分業論は需要即ち市場を媒介とする生産力の増大を説いて居るといふ事はその通りである。然し彼の時代には、生産力は傳統、身分、組合といふやうな封建的な制約を受けてその増大が阻まれ居た。彼の分業の原理は此制約から

生産力を解放するといふ大きい役割を果したのである。そこに生産力の原理が一般化し、生産力が非常に高い水準に達し、資本主義が展開して來た。處がその資本主義の内部に色々な矛盾が発生するやうになつた。——失業はその矛盾の一つである——そこで之をもつと合理的な形に再編制しなければならぬといふ事になつたのであるが、此編制替の原理はやはり生産力の原理でなければならぬ。

以上の様に、需要の原理に立つ可きか、生産力の原理に立つか、二つの立場が對立する。然し之等二つの立場に共通の點は、最後の問題は生産力だといふ點である。そこで此場合の問題は、自由市場を媒介とする所の生産力の發展機構と、雇傭の調整、生産と消費とのバランスといふやうなものは國家が計畫的にやるといふやうな機構と、之等二つの機構の内どちらの方が生産力の發展には有利かといふ事になる。ピツアリッチは需要の原理に立つて完全雇傭を實現しようとするのであるが、その場合第一の機構、即ち自由市場といふ自由な交換機構に依存する態度を或程度捨ててかかつて居ると思はれる。例へば自由市場ではどうしても出て來ないやうな需要を國家が作

り出して行く。健康住宅とか特殊の病院とかの様な自由市場からは出て来ないやうな需要を國家が創り出すことによつて問題を解決して行かうとする。

此様な立場は市場機構を媒介としないで、國家が計畫的に生産力を發展させて行かうとする考方と少くとも結論の形の上では似て居るのではないか。恐らくイギリスで社會主義化が行はねばやるだらうと思はれることと具體的には餘り違はないのではないか。さういふ風に考へる事が出来ると思へば、具體化された結論に於ては、二つの對立する原理は共通だと言ふ事が出来るのではないか。

同時に、需要の原理と生産力の原理と列べて見て、前の方を資本主義、後の方を社會主義と考へて、どつちの方が生産力を大きくするに有利かといふ事は決定出来ない問題だといふ考方もある。二つの體制は夫々生産の質乃至種類を異にして居るのであるから、之等と比較することは元々出来ない問題である。ビヴァリッチは計畫的資本主義の立場をとるのであるから、一應消費の自由を認める。然しそれだけでは失業問題が解決されない。そこで國家が需要を造り出し、之をブラスした需要の總計を以つ

て生産を維持して行かうとする。之れに對して、消費の自由を抑へなければ問題は解決されないといふ立場に立つと、需要は最初から計畫的に國家が定めてかかるといふ社會主義體制に進んで来る。だから此二つの立場の相異は生産の種類の問題であり、生産力の大きさ、どちらの方が生産力から見て發展のかといふ事は測定が出来ない。二つの原理と生産力との關係に就て以上の様な三つの立場があるが、理論的にも實證的にも、何れの原理がより有利かといふ問題は此懇談會の限りでは結論を得なかつた。此問題は結局の處、計畫資本主義がよいか社會主義がよいかといふより廣汎な問題として扱はねばならない。此所に取り上げた完全雇傭の問題としては之以上問題を擴める事は出来なかつたし、現在の實踐上の問題としては何れの原理に立つとしても非常に似通つた對策がとられるものと考へられる。

#### (合理主義の途)

元來資本主義原理と言ひ、社會主義原理と言ひ、經濟はいつでも合理的な原理によつて動いて居るのであり、之等の主義は何れも合理性追及の外枠である。だから人間



の經濟は資本主義、社會主義、共產主義といふやうな色々な形態を経ながら合理的なものに向つて進んで來たのである。だから社會が一定の人口とか技術とか天然資源とかその他歴史的な種々な社會的條件を與へられて居て、その條件の下に一つの社會的目的を達成するのに何ういふ體制が最も合理的であるかによつて、資本主義か社會主義か、或は計畫資本主義かといふ様な形が定つて來る。

今日本の場合に就て考へて見ると、今直ちに資本主義か社會主義か、その何れを擇ぶかといふやうな餘裕はない。現在の日本の經濟状態は水準線よりも遙かに以下にあるのだから、今最も肝腎な事は水準線迄駆け上る事である。水準線に駆け上るには今日迄の資本主義的な經濟運営の武器を最も有効に使つて行く。然しそれだけでは、例へば個人的需要とか競争とか言ふ様な道具立だけでは間に合はない所があるから色々な統制計畫の要素を入れて無駄な摩擦を避ける。かうして出来るだけ早く水準線に達するといふのが今の問題であり、之れが戦後に於ける我國の經濟の進む可き第一の段階である。

だから此第一段階に於て採られる對策は、非常に社會主義化した形が採られるとしても、それは資本主義體制から一足飛びに、段階を経ずにいきなり社會主義體制になつたのではない。此場合は、此様な社會主義的な急激な對策を行ふ地盤といふものは依然資本主義經濟の中で培はれた地盤である。此地盤の力を無視して直ちに社會主義體制になる事は出來ない。此意味から言へば、現在採らる可き途は社會主義的な外觀を持つ所の資本主義の奇道であるといふ事が出来る。勿論此所で社會主義的な對策がどの程度取り入れられるかといふ事は勞働の原理を使ひこなす力がどれ程成熟して居るかといふ事によつても違つて來るだらうが、資本主義の奇道を進まねばならぬといふ事は疑ない。

次の第二段階で始めて社會主義體制がどんな形で造られるかといふ事が問題になつて來る。その場合勞働者側、農民側、資本側の何れに就ても整然たる合理主義的客觀的な組織化が出來上つて居るとすれば、而かもその場合資本主義の埒内ではどうしても解決がつかない、社會主義體制に移らざるを得ないといふ關係になつて來るとす

れば、その時始めて合理的な形で、無用の混亂なしに社會主義體制が出来上つて来る。といふ事が出来る。

#### IV 計畫經濟と經濟學方法論

##### 1 ミクロ・コスミック分析とマクロ・コスミック分析

經濟の變化は經濟思想を變化せしめ經濟學を變化せしめる。第二次大戰を轉期として計畫經濟化の要素が如何に不可避的に強くなるかといふ事、社會主義化の色彩が世界共通の傾向として顯著に現はれつゝあるといふ事は今迄述べて來た通りである。そして此様な變化が、さしづめ經濟學の上にも一つの大きい變化を齎しつゝある事も極く總括的な問題として既に述べた所である。次は此様な經濟學に於ける變化に就て稍立入つた考察に入るのであるが順序として方法論の變化を最初に取擧げねばならない。此所ではミクロ・コスミック分析とマクロ・コスミック分析との交渉を考へるのであるが、戰後經濟の計畫化乃至社會主義化が之等二つの方法論上の立場にどう影響するかを考へる前に、此解説篇では之等二つの立場の意味と特徴とを述べておく必要がある。

あると思ふ。

ミクロ・コスミック乃至ミクロ・ダイナミックな分析、又はミクロ・アナリシス（微視的分析）とかマクロ・コスミック乃至マクロ・ダイナミックな分析又はマクロ・アナリシス（巨視的分析）とかは今日廣く知られる様に自然科学の概念であり、經濟學に之等の言葉を用ひる場合は飽く迄も比喩的である事は言ふ迄もない。極く一般的に言へば、ミクロ・コスミック分析（以下ミクロ的分析と言ふ）は經濟現象の個別的な立場からの分析であり、之に對してマクロ・コスミック分析（以下マクロ的分析と言ふ）は總體的な立場からの分析である。以下述べるやうに計畫經濟の發展に伴つてマクロ的分析が漸次前面に押し出され、ミクロ的分析はその主位を前者に譲るといふ傾向が見られるのである。

從來の理論經濟學はミクロ的立場からの分析を行つて來た。アトミック（原子的）或はアトミステイック（原子論的）と言はれるのは此所に謂ふミクロ的といふのと同じ立場を意味するものと解釋して差支へない。此方法論的立場は、經濟といふ一つの

世界を機械論的に見る經濟觀と密接な關係を持つて來た。つまり經濟世界を一つの與へられた、動かし難い組織と考へ、此様な經濟世界を、之を構成する個々の構成分子の分析から理解しようとして來た。だから此立場は構成分子たる多數の個を集計するとそれが總體としての經濟世界になると考へる。（尤も之は歴史的にさうであつたといふ意味であり、此方法論自體が論理的にさうでなければならぬと言ふのではない。）此意味から此方法論は個別的方法論とも呼ばれる。今一つの例を擧げて見よう。

ミクロ的分析の一つの例は理論經濟學に於ける効用の概念である。此場合の効用といふのは消費者としての個人が財の所有又は消費によつて得られる慾望の満足といふ意味である。此意味の効用の大きさが財に對する各個人の價值評價の大きさを定め、之が財の單位生産費と共に財の市場價值乃至價格の決定要因となる。これから財の價格は、その財に認める個人の効用の大きさ、即慾望満足の大きさが反映すると考へられ、引いて價格によつて生産量と生産の種類とが定まるといふ價格經濟は、社會全體の受取る効用の總量を極大にするといふ一つの結論が導き出される。つまり此場合は

社會全體の享受する効用の總量即ち慾望滿足の總量、生産量並に生産構成、價格の決定等の如き一連の經濟現象が、個人の効用の分析から導き出されたといふ事になる。

マクロ的分析の最も主要なものであり、現在迄の處殆んど同じ意味に用ひて實際上差支ないと思はれるのは所謂構造分析である。此方法論的立場は、之によつて經濟を總體として擷まうとする所にあり、ミクロ的分析からは出て來ない所の原因結果の關係乃至社會性を明にしようとする。同時に又此立場は、經濟は動かすことの出來ない、與へられたものと考へるのではなく、吾々の力によつて何等か動かし得るもの、變へ得るものと考へる經濟觀と密接に關聯する。マクロ的分析が經濟の計畫化、社會主義化と共に發展して來たといふのは、之等が經濟の總體的理解を必要とし、現象の因果關係を明かにする必要から許りではなく、經濟觀の此様な變化とも關聯する所である。今マクロ的分析の一つの例を擧げておかう。

マクロ的分析の一つの例として國民所得の構造分析を擧げる事が出来る。國民所得を所得の源泉の觀點から地代、利潤、利子、俸給、賃銀に、或は資本所得、勤勞所得に分類してその分布並に分布の時間的變化を分析する。農業、鑛業、工業、商業、自由職業、家事等産業別の分布と時間的變化、或は所得額による分布と時間的變化の分析或は更に各所得範疇の相關々係等が之である。此様な國民所得の構造分析は他の觀點からの色々な分析と理論との援助を受ける事によつて、又逆に之等に援助を與へる事によつて、國民經濟の總體的現實的な映像を書き出す許りではなく、國民の生活水準とその變化、資本と勞働との關係とその變化、蓄積資本の源泉、速度並にそれと國民所得の變化との關係等々、ミクロ的分析によつては到底明かにする事の出來ない多くの事實を明かにし、夫等を説明し或は説明の手懸りを與へる事が出来る。一國の經濟を計畫化し統制しようとする時、此様な構造分析なくして如何にして可能であり得るか。

此所ではミクロ的分析とマクロ的分析との二つの立場の主たる特徴と、夫々一つの例を擧げてその言葉の意味を説明したに止まるのであるが、之等二つの立場の持つ學問的並に實踐的意義は、懇談會に關する以下の解説を通じて明かにされると思ふ。

## 2 二つの分析理論の交渉

二一六

(經濟學のミクロ的性格は失はれるか)

從來の自由主義を基調にした理論經濟學はミクロ的分析理論の上に造り上げられて來たのであるが、前にも述べた様に、經濟の計畫化乃至社會主義化の發展に伴つてマクロ的分析理論の重要性が高まつて來る。かうして從來の理論經濟學は方法論に於ける變化からその性格が變つて了ふのではなからうか。科學としての經濟學のミクロ的性格が失はれて了ふのではないだらうか。

此問題に對して、その様な經濟上の變化乃至發展はマクロ的分析の重要性を大きくはして來るが、然し經濟學のミクロ的性格を變へるものではない、といふのが第一の答案である。今後マクロ的分析の重要性は益々大きくなるといふ事は勿論否定し得ないが、その場合に於てもミクロ的分析のないマクロ的分析なるものは成立たない。計畫經濟を行ふとすれば、總體としての所得とか投資とかを掴んで國民經濟を全體とし

て考へなければならぬ。此所にマクロ的分析理論の必要は益々大きくなつて來る。然しその場合にも投資する者の、個人としての行動にはアトミスティックに考へねば説明出來ない部分が残るのである。窮局の投資者は個人としての資本家とか企業であるから、之等個別的な投資者が如何に投資するか、投資しないかといふ事はミクロ的分析によらなければ説明が出來ないだらう。

此點は純粹な社會主義社會が出來上つたと假定した場合の經濟學にもあてはまると思ふ。マルクス價值論は資本主義の分析には有力な武器ではあつたが、純粹社會主義經濟にも尙妥當するか何うかといふ事は最近アメリカ等にも論争が展開されて居るやうだが、假りに彼の價值論は取れないといふ事になればどうなるか。その場合には、やはり個人の生活欲求の充足の程度、乃至慾望満足の程度に應じて個々の財の價值を考へるといふ事にならねばならぬ。さうすれば、勿論新しい形に於てではあるが、即ち統制され社會化された生活欲求の充足ではあるが、やはりそこに効用の概念が展開されねばならぬ。此効用といふのは個人とか、個人の生活とかを基礎にするのである

二一七

から、依然アトミスティックな或はミクロ・ダイナミック・システムが経済學の基調になると考へられるだらう。

ロシアの社會主義でも最初は價格のない經濟といふやうなものを考へて居た様であるが、色々やつて見た結果として價格を認めた計畫經濟に移つて來たやうである。ロシアでは多くの統計資料を使つてマクロ的分析をやつて、之れを計畫經濟の道具にするのであるが、此計畫を實現する際にはやはり個々の消費者とか生産者とかの反應を見て行く。かうして個人を基礎にして計畫を建て或は建直しをする。かう考へると從來の經濟學のミクロ的分析を否定し去つて居る譯ではない。唯その場合にも常に社會全體としての重要度を入れて考へて行くといふ所にマクロ的分析が入り込んで來る譯である。

以上の考方によれば、計畫經濟でも社會主義經濟でも、マクロ的分析理論を基調とするといふ點に於ては經濟學は變らない。唯マクロ的分析理論は此様な經濟體制の變化に伴つて段々その重要性を増して來るといふ事は認めねばならないといふのである。

懇談會に現れた他の意見に於ても、マクロ的分析の重要性が高くなるといふ點に異論はない。唯それが重要になるにも拘らず依然として經濟學がミクロ的性質を維持するだらうといふ點には意見の對立がある。

(何れの分析理論が基調になるか)

理論經濟學のミクロ的性格は計畫經濟化、社會主義化に伴つて變質を遂げるだらうといふ考方にも尙二つの立場があつた。第一は、經濟學にはミクロ的分析とマクロ的分析との二つの領域があり、マクロ的分析領域の方が益々大きく擴がつて來るといふ立場である。第二は、經濟學の分析理論はミクロ的よりマクロ的に發展し、結局經濟學はマクロ的分析理論を基調とするやうになるといふ立場である。先づ第一の立場を説明する。

經濟組織が將來にかけて變るとしても、その場合にも個別經濟的な要素、個人の欲求とか企業の個別的な活動とかはやはり經濟組織の中に大きい領域を占めて行くだらう。さうすればミクロ的な分析理論も亦經濟學にとつて相當重要な場所を持ち續ける

に違ない。然しそれだけが全部ではなくして、マクロ的分析理論がそれと併んで用ひられて来る。マクロ的な立場は従来と雖もあつたわけで、或意味に於てはミクロ的立場と拮抗して来たのであるが、將來はその領域が益々廣がつて来ると思ふ。

此場合考へねばならないのは分析といふ言葉の意味であるが、ミクロ的な立場で、例へば価格を分析するといふのも一つの分析であるが、之れと違つた領域に於てマクロ的な立場から經濟構造を分析するといふのも一つの分析である。価格を例にとつて考へて見ると、經濟組織なり經濟機構なりは一應價格關係とは別個のものであるが、然し價格を支へて居る地盤である。逆に言へば、價格關係は此地盤を蔽ふて居るヴェールの様なものである。處が資本主義の發展に伴つて此價格關係は變質を遂げて来たわけであるが、今後も益々變質して行くだらう。此様な變質は價格そのものを、ミクロ的立場からどう分析して見ても説明はつかない。そこでその地盤をなすして居る經濟構造を分析して見ると始めてその變質の説明が導き出される。

さうして見ると分析理論には、價格の相互聯關を對象とする様なミクロ的立場と、

それを支へる基礎構造を分析の對象とするマクロ的立場との二つの領域があると言ふ事が出来る。此様に二つの立場には夫々の領域があるが、將來之等の何れもが二本建で進んで行くかどうかといふ事は別の問題になる。經濟體制が社會主義化するに伴つてマクロ的立場が基調になり、従來のミクロ的立場が考方としては否定されて来る。ミクロ的な立場に立てば、例へば個々の經營の立場の總計が同時に全體の經營の立場だといふ事になるとすれば、此立場は考方としては否定されねばなくなる。然しミクロ的な立場は經濟運營の技術として、例へば價格方式を運營上の一つの技術として利用するといふことになる。かうして方法論として二つの領域が依然として併存するのであるが、一つは唯經濟運營の技術として残され、他の一つが經濟の考方として前面に出て来るだらう。

以上の第一の意見に對して、第二は經濟の計畫化、社會主義化に伴つてミクロ的立場からマクロ的立場に、或は基調をマクロ的分析理論においた經濟學に發展を遂げるだらうといふ意見である。此所では次の様に考へられる。

經濟學がポジティブ・サイエンスであるといふ事は今後とも恐らく變る事はないだらう。然し周圍の條件が變つて來るから、それを分析する道具立は變つて來る。從來は原子論的な世界を考へ、極端にミクロ的な調和を考へるといふ見方であつたが、これはもう役に立たない。マクロ的な考方をウンと入れなければ現實の經濟現象は最早理解出來ないやうになつた。

一つの例として資本の能率を取擧げて見る。此場合ミクロ的立場から個々の資本の能率を考へるか、マクロ的立場から社會全體の資本能率を考へるか。從來は、個々の資本の能率が高ければ之を集計して社會全體の資本能率が高いと考へられた。之は社會全體の需要乃至欲求が價格經濟を通じてこの形で表現されて來ると考へられるからであり、明かにミクロ的立場である。之に對して社會全體の欲求のシステムを考へ、欲求の體系をハッキリした形で出すとする。例へばロシアに於て何か素晴らしく大きい立派なダムの計畫を立てるとする。之は何か特定の社會全體の立場からの目的を考へての計畫でなければならぬ。さうするとロシアといふ社會全體の欲求のシステム

といふものが特殊の形で出て來る筈である。此場合の資本の能率はミクロ的に個々の資本の能率の集計から判斷する事は出來ないで、社會全體としての欲求充足といふ立場、マクロ的立場から判斷する必要が起つて來る。

と言つてロシアでも前にも述べた様に價格を媒介にして全體を綜合するといふ價格制度を考へて居るのであり、さきの例のダムを計畫する様な場合にも、價格を媒介にして計畫を實行する、或は一旦計畫したものを実績を見ながら變へて行くといふやうな方法が考へられる。かうして個人的と全體的、ミクロとマクロとの間に一定の連絡が保たれなければならぬ。然し此場合にも唯兩方の立場が單純に結付くといふのではなくして、ミクロ的からマクロ的へと發展する。マクロ的立場が基調になつてミクロ的立場が従たる地位に立つ様になると考へられる。

### 3 經濟の發展と方法論の發展

以上の説明によつてミクロ的分析理論は將來も重要な役割を占めると言ふ事は否定



されないが、経済の計畫化、社會主義化に伴つてマクロ的分析理論の役割が大きくなり、何等かの意味に於て分析理論の基調をなすに至るだらうといふ事が明かにされた。それでは此様な分析理論の發展を促すものは何であるか。

經濟學の方法論のミクロ的からマクロ的への發展を促した事情として次の三つを考へる事が出来る。

一、方法論の論理的發展

二、經濟構造の變化

三、經濟世界の見方の變化

之等三つの事情は相互に無關係ではなく内的に關聯性を持つて居るのであるが、一應之等を切離して考へる事が出来る。

一 第二、第三の事情が方法論の發展を促す地盤であつたといふ事は容認するとしても、そこに尙方法論自體の論理的發展といふものが考へられる。現實の經濟秩序をミクロ的立場から分析するだけでは足りない。正しくなかつた。かういふ反省は當然

方法論的發展を促さなければならない。勿論此様な反省は經濟構造そのものが變化したといふ現實的地盤が出来上つて來たからであり、又計畫經濟的要素が強くなつて來たからではあるが、唯單に此様な學問の外側から規定されて方法論が變るといふだけではなく、學問の内側からの動因も見逃すことは出来ない。

二 大體物理學ではマクロ的分析からミクロ的分析に、因果の法則から偶然の法則に發展して來たのであるが、經濟學に於てはミクロ的分析からマクロ的分析に向つて、物理學とは逆の方向に發展して來て居る。物理學も經濟學も共に實證科學ではあるが、經濟學の方法論の變化は、物理學と違つて、經濟構造の變化と表裏一體である。ミクロ的方法にマクロ的方法が同化或は吸収されるか、逆にマクロ的方法がミクロ的方法に同化或は吸収されるかの問題を唯方法論自體の問題としてのみ考へたのでは解決されない。經濟構造の變化の側面から問題を見なければならぬ。何故ならば、經濟構造自體がミクロ的からマクロ的に動いて行くからであり、それに對應して經濟學の方法論も亦動いて行かねばならぬ。

三 ミクロ的分析理論は、經濟世界を一つの機械的な動かし得ない、與へられた秩序と見て、その機械的な世界乃至秩序の中での法則を分析するといふ所になり立つ。之に對して經濟秩序は動かし得る、變へる事が出来るといふ見方が起る場合にマクロ的分析理論がこつて来る。一つはロシア的な計畫經濟であり、もう一つはアメリカ的な統制である。之等は經濟の全體的な構造をとらへて、計畫經濟、統制經濟の基礎にするといふ考方である。つまり計畫といふ要素を入れた所にマクロ的な考方が成立するやうになつた。

此事は經濟變動の理論に關聯しても言ひ得る事である。例へば從來の景氣變動論では單に景氣の上下運動のみが問題となつて居て、それから出て来る發展の方向とか速度とかは問題になつて居ない。之はミクロ的分析の立場に立つからである。處がマクロ的分析の立場に於て、經濟構造の面から迫つて行けば、その構造自體が同時に進む可き方向も速度も持つて居るといふ事が明かになる。之は經濟の豫見の問題とも密接に關聯するのであるが、ムアアの「綜合經濟學」の中に出て来る豫見は明かにミクロ

的方法論をとつて居る。そこでは米とか砂糖とか小麥とかの様な個々の作物の統計資料を指標として將來を豫見しようとして居る。處が今後の豫見は、經濟構造全體を洞察する所に可能となるのであり、ムアアの豫見では役に立たない。此意見に依れば今後はミクロ的豫見からマクロ的豫見に移らねばならない。これは結局經濟の構造そのものが經濟の見方を規定するからである。

## V 資本主義的經濟學と 社會主義的經濟學との交渉

今迄は、經濟の變化が經濟學を如何に變化せしめるかに就て考へて來たのであるが、これからは此問題から離れて資本主義經濟學、社會主義經濟學といふ二つの相對立する經濟學が今後如何に交渉し合ふかの問題に入つて行く。之等の間には色々な交渉の形が考へられるだらう。第一は二つの經濟學が統一されて一つの經濟學が形成されるといふ形、第二は資本主義經濟學が變質又は變形して、社會主義經濟學に吸收或は同化されるといふ形。又はそれと逆の形。第三は資本主義經濟學又は社會主義經濟學が消え去つて、他の一つが修正され又は修正されない儘に残るといふ形。一應此様な色々な形の交渉が考へ得られるわけであるが、此所では之等二つの經濟學の統一が可能であるかといふ第一の形を問題にすることによつて懇談が進められた。この問題

を通じて前の問題「計畫經濟と經濟學方法論」と共に、現代の經濟學の進むであらう途を明かに示し得たものと思ふ。

問題は非常に廣汎であり、複雑であり且つデリケートである。そこで前篇速記録の方も、「方法論の立場から」「批判的態度の立場から」「階級の立場から」といふ三つに整理しておいたが、此所でもやはり同じ様に分類して解説する事にする。

### A 方法論の立場から

#### 1 資本主義的經濟學・社會主義的經濟學の意味

此所で資本主義的經濟學とか社會主義的經濟學とか言ふ字を使ふのであるが——主義の下に「的」といふ字を入れる場合も入れない場合も一般に區別しないで使用されて居る——此言葉は懇談會でも一應問題にされた様に曖昧である。然し敢て此様な言葉を選ぶのは、之が非常に廣く社會に用ひられて今日一般の通用文句になつて居るからである。その爲に、「經濟學は將來何うなるか」といふ事が一般に問題にされた場

合、その問題の含意は恐らくかういふ事だらうと思ふ。今日經濟の方は計畫化されるし社會主義化の傾向が強い。それと併んで社會主義經濟學も盛んに論じられて居てその勢は甚だ強い。それで從來支配的であつた資本主義經濟學は何うなるのだらうか。(此質問が何故起るかに就ては「問題の提起」に於て述べておいた。)かういふ事だらうと思ふ。そこで漠然とはして居るが此言葉を使用したわけである。

然し此問題を嚴密に考へて行くとなれば、漠然とした一般用語の儘にこれを使つて行く事は有害である。此意味を明瞭にしておく必要がある。一般に社會主義經濟學又は社會主義的經濟學と言はれるのはマルクス經濟學並にマルクス主義經濟學の事であり、社會主義經濟の經濟理論といふ意味ではない。だから此立場の經濟學は社會主義の立場からする資本主義經濟の分析を内容とする。之に對して資本主義經濟學又は資本主義的經濟學と言はれるのは、同じ様に資本主義經濟の分析を内容とするものではないが、從來は自由主義の立場からの分析である。然し近來、經濟が統制化乃至計畫化されるに従つて、純粹な意味の自由主義的立場といふものは實際上はあり得ないの

であるが、唯原則としてのみ此立場をとる場合もあれば、純粹な自由主義經濟を假定する場合もある。何れも資本主義又は資本主義的經濟學と言はれる。

懇談會では之等二つの經濟學をどういふ意味に解するかといふ事が、之等は資本主義を分析する二つの立場として考へるのか、或は資本主義經濟と社會主義經濟とを二つ對立させて考へるのかといふ形で問題にされた。結局資本主義分析の立場が、之等二つの經濟學を區別するといふ事になるのである。此様な立場の方法論的意味は漸次明かにされる所である。

## 2 二つの經濟學の統一

此様な二つの立場にある所の、一般的には相對立するものと見られる所の經濟學は飽く迄も對立の姿で併行するものであるか、或は何等かの形で統一されるものであるか。此所では問題を方法論の觀點から眺めて行く事にする。此問題に就ても、懇談會での意見に完全な一致を見得なかつたのであるが、然しその底には或程度の調和が見

出されなくてもないと思はれる。

イ 統一は不可能だといふ立場

最初に統一は不可能であり、二つの経済學は併行して發展する。然し相互に相手方の發展によつて利益を得るだらうといふ立場を述べる事とする。

(經濟學の二つの任務)

經濟學の任務は一體何處にあるか。從來經濟過程といふものは自然的な過程だと考へられた。即ち人間があゝしよう、かうしようと考えて、作り出したり作り直したりしたものではなくて、人間が色々な條件の下に社會を形成する場合には自然的な過程として一定の姿の經濟が出来上つて來ると考へられた。經濟がこの様なものであるといふ事は現在も昔も何等變る所がないのであるが、問題は此自然過程たる經濟を合目的化するといふ所にある。換言すれば、此經濟を合目的化する理論、或は此意味の政策理論がなければならぬと言ふ點である。

かういふ點から見ると、經濟學は二つの任務を持つて居ると思ふ。その第一は、經濟現象の計量である。近年統計的研究が發展し之が經濟學に採入れられて來たといふ事は既に述べた通りであるが、此傾向は明かに經濟現象の計量即ち經濟の量的把握への發展を意味して居る。此傾向は經濟の計畫化を可能ならしめて來る。即ち自然過程たる經濟を合目的化する可能性が多くなつたと考へる事が出来る。之は明かに經濟學の一つの重要な任務であり、所謂資本主義的經濟學は此方向に向つて進んで居ると考へる事が出来る。

經濟學の第二の任務は、經濟現象の社會性を明にするといふ點にある。此様な、經濟學の思惟に於ける社會性と言ふか、この社會性を明にするといふ事は結局現代の經濟組織の批判がなければ出来ない問題である。所謂社會主義經濟學は此任務を擔當して來たのであり、此點に於て非常に進歩した學說である。

此様に經濟學には、經濟現象の計量と社會性の究明といふ二つの任務があるが、第一の任務は資本主義的經濟學が果して來たと共に益々その方向に發展する可能性を示

すに對し、第二の任務は社會主義的經濟學が擔當し、此經濟學はこの任務を果すことに於て優れた經濟學である。

(二つの經濟學は交渉しつゝ、併行する)

それでは之等別々の任務を擔當して發展して來た二つの經濟學は結局に於て統一され、共通の地盤に立つて一元化されるか何うか。第一に之等二つの經濟學は夫々の課題を解く爲めに將來も益々精緻になり、何れも將來に向つて存續して行くだらうと思ふ。

第二には、精緻になつて行く之等の二つは互に相手の武器を利用し乍ら發展して行くといふ意味に於て交渉して行くだらう。元來、經濟過程を一つの自然的な過程と考へ、之を純客觀的に取扱ふといふ事は、第一にはその社會を全體的に見るといふ事であり、第二にはその社會に於ての在る可き運動法則を追究する事である。此法則が明確にされない限りは經濟を合目的化することは出來ないだらう。だから此様な經濟の法則性を追究するといふ意味の理論が先づなければならぬ。社會性を明かにする理論

といふのは此理論の事である。處が此理論によつて社會性が闡明されたとしても、それだけではまだ經濟現象間の數量的な關聯が明かにされない。此點は所謂現代經濟學乃至資本主義的經濟學が可なり明瞭にして來て居ると共に今後益々此方面に進歩するだらう。そこで社會主義的經濟學は、此量的把握の面を資本主義的經濟學から受取つて、經濟過程の合目的化といふ任務を果し得るやうに發展するであらうし、資本主義的經濟學は、社會性の闡明といふ面を社會主義的經濟學から學びとることによつて同様の發展をするだらう。

以上の様に、二つの經濟學は相互に利益し合ひ乍ら、將來に向つて併行的存在を續けるであらうが、之等が共通の地盤に於て一元化され、統一されるであらうとは考へられない。勿論之れが提携するやうになれば、一層理想的な經濟學が出來るだらうが、さうなるものとは考へられない。

□ 統一が可能だといふ立場の一

二つの經濟學の交渉は認めるが夫等が統一され一元化されるとは考へられないといふ上述の立場に對し、此統一は可能であり、少くとも統一の方向に向つて發展しつゝあるといふ立場が主張される。懇談會では此統一可能論が、稍異つた二つの觀點、然し多分に共通性のある立場から二人の出席者によつて述べられて居る。之等二つの考方を順次説明して行かう。

(原型としての理論)

前の意見にあつた様に、經濟理論の政策化といふのが今日理論經濟學全體の方向だといふ事は異論のない所である。且つ此經濟學がその任務を果す途の第一は經濟關聯を數量的に把握して計畫經濟化の可能性を作り出して行くといふ事であり、第二は經濟現象の社會性を明にするといふ事である。此考方にも異論がない。唯此處で問題とするのは、之等二つの途の何れにも、かういふ形を取る前の謂はゞ原型としての理論があるのではないかといふ事である。

例へば、前にも述べた通り、國民所得の研究とか雇傭の研究とかが進んで行つて、

之等の數量的把握が完全になつて來るに従つて經濟の計畫化の可能性が大きくなつて來る。處が此様な國民所得を數量的に掴むのにも色々な方法がある。唯澤山の數字を集めて、之によつて經濟關聯の計量化をやらうとしても出來ない。そこには豫め一つの理論があつて、その理論によつて集められた數字が組立てられて行かないと國民所得なり、雇傭なりの數量的把握は出來ないだらう。さう考へて來ると第一の計量化の途に、やはり一つの純理論の問題が存在して居るといはねばならない。

第二の經濟現象の社會性を明かにするといふ事、又その社會性によつて現在の經濟體制を批判するといふ事は現在迄社會主義的經濟學が果して來た大きい役割である。處が此場合にもその底に一つの理論があるわけであり、此理論なくしては科學的社會研究としての強さは出て來ない。

此様に經濟學の二つの途の何れもが、一つの原型としての理論が豫定され或は前提となつて居るのである。そこで此様な謂はゞ純理論といふものは如何なる性質のものかといふ事が問題にされねばならぬ。もし之等二つの途に豫定される理論の間に何等

の共通性もないといふ事であれば、経済學の二つの課題は、別々の立場に於て追及され、従つて二つの経済學は相互に別々の経済學として併行する可能性が強い。然し之等の間に共通性が見出されるものとすれば、二つの経済學は漸次共通の地盤の上に立ち、統一化される可能性が強くなつて來ると考へる事が出来る。

(共通の地盤の形成)

實際の問題として考へて見れば、今後相當長い期間に亘つて、之等二つの側面が併行して行くだらう。然し相互に併行し乍ら交渉を續けて行く間に、夫々の原型になつて居る理論がもつと統一的な立場に於て考へられるやうになり、結局は一元化されるのではないかと思ふ。事實、部分的ではあるが既にその氣運が動いて居るといふ事も見逃してはならない。

その一例は「經濟變動の研究」に現はれるカレッキの考方である。(M. Kalecki, Essays in the theory of Economic Fluctuation, London, 1939) 彼は此書物の中で、從來の限界生産費の概念を使つて獨占とか國民所得とかの問題を統計的分析に結付けて考へると

同時に、そのやうな統計的分析を用ひないで建てられたマルクスの理論との交渉を終始反省して行くといふ方法を取つて居る。此様な行方で研究を續けて行けば何かそこに共通の理論的地盤が出来上つて來るのではないか。

もう一つの例として價值論の問題を擧げて見よう。マルクス主義價值論は資本主義經濟の分析としては非常に有効だといふ意見が、今日では資本主義的經濟學者の陣營からも認められるやうになつた。然し資本主義自體が段々獨占資本主義、金融資本主義に移つて行くといふ場合、此様に變質を遂げつゝある資本主義の段階に應じて、例へば修正資本主義といふ段階に應じて考へ直して行かねばならぬのではないか。かういふ問題が起つて來る。他面、ソ聯に於ける新しい價值論としては、資本と資本による搾取といふやうなものを前提とする労働價值説で分析が出来るかどうかといふ事が問題になる。僅かな文献からの推測によつて見るに、ソ聯の經濟學者の中から此様な問題が提起されて居る。

この様に考へて行くと、價值論といふやうな部門に於ても、統計學的研究の基礎に



なる理論と、社會性を明かにし、批判的立場をとつて行く價值論との間に段々密接な交渉が起つて來て、やがて之等を共通の地盤に於て取扱ふといふ風になるのではないだらうか。

さうすると、二つの途が併行して行くものとしても、之等の間にもう少し有機的な關係が発生して來るだらうと考へられる。之れが何處迄行つて、どう展開するかといふ問題は、資本主義自體の將來にも關聯する所であつて豫測は出來ない。然し併行して行くだらうといふ可能性が強いといふ事は認め乍らも、尙その底には兩者に共通な地盤の形成、二つの經濟學の一元化の胎動を認めたいと思ふ。

#### ハ 統一が可能だといふ立場の二

以上は、統一が可能だといふ立場の一つを述べたのであるが、此所で同じ立場の他の一つを説明する事にする。

#### (相關々係の分析と因果關係の分析)

メンガーによると經濟現象の取扱の態度には二つある。その一つは現象間のコエキヂステンス、相關關係を追及するといふ態度であり、他の一つはカウザリテート因果關係を追跡するといふ態度である。實際に於て現在迄之等二つの扱ひ方が夫々發展して來た。社會主義的經濟學によつて經濟現象の社會性が追及されて來たといふ場合は、メンガーの云ふカウザリテートの追及の立場に重點がおかれて居たといふ事が出來る。之に對して資本主義的經濟學が原則として經濟的量的現象の相互依存關係乃至共存關係の精密な分析を中心として發展して來たのは、コエキヂステンスの追及といふ立場に立つて來たのである。

結局經濟學の二つの任務乃至途として最初に擧げられた問題。即ち第一の經濟現象の計量は此場合のコエキヂステンスの追及といふのに應ずるものであり、現在迄資本主義的經濟學が多く功績を擧げ、現に發展をなしつゝある途である。第二の社會性の究明は此場合のカウザリテートの追及に應ずるものであり、社會主義的經濟學の取つて來た立場である。

(二つの立場の反省)

そこで之等二つの立場が如何に交渉するかといふ事が問題になる。第一のコエキヂステンスの追及の立場からの分析を經濟學の任務と考へその分析を精密にして計量的な追跡を行つたとしても、此所からはカウザリテートの關係は一向出て來ない。勿論此場合にも何かの社會關係を引出すといふ事も屢々行はれるのであるが、之れは單なる獨斷論であり、本來は出て來ない筈のものである。此立場は現象の數量的な精密分析に焦點をおくと云ふのであるが、實はその態度自體既に社會的なものを含んでゐるのである。分析する者自身がこれを意識しない場合迄も含めて、一つのポリテイカルな判斷が明かに豫定されて居ると思ふ。

計量的な考察の重要性が今後益々大きくなるといふ事は疑ないのであるが、それは飽く迄も現象の因果關聯を辿るといふ全體の枠の中に場所を與へられるものだと思ふ。だから此處で重要な事は、その計量が益々正確精密になつて行き乍ら而も全體の枠が絶えず反省されて行くことではなからうか。此場合に初めて正しい計量的な地位

が與へられる。逆に計量だけに焦點をおく所の、例へばエコノメトリック的な立場、あゝいふものだけによつて經濟分析が完了したと考へるとすれば、それ自體既に社會的な問題を回避して居るといふ點で一つのポリテイカルな立場と言へると思ふ。

メンガーは此二つの態度を併立的に列べて居るのであるが、實は之等二つの扱方は相互の關係を反省しなければならぬのであつて、既にその時期に來て居るものと思ふ。前にカレッキの考方、マルクスの價值論等を引用して述べられて居るが、之等も亦此枠の問題が意識されかゝつて居るやうに思はれる。

ニ 共通の地盤の形成の爲に

以上の論點を綜合して見ると、二つの經濟學の統一、一元化が非常に困難であるといふ事が充分窺へるのであるが、第一に之がもし出來れば非常に理想的であるといふ事には異論がない。従つて第二に二つの經濟學に共通の地盤を形成するといふ事に經濟學の方向を向けて行く事が必要だといふ事にも異論がない筈である。そこで懇談會

に於ける此問題に關する限りの結論として、計量的立場と社會的立場との二つの立場が結局何をなす可きかと述べられたわけである。

(計量的立場の反省)

從來二つの經濟學のやり方が併行して進んで來た様に見えるが、理論の問題として之を見れば焦點は一つだと考へられる。唯從來の分析の具體的過程に就て見ると、一つは相關的の現象を數量的に擱へる方法を探り、他の一つは同じ相關的の現象を社會的觀點から批評して行くといふ方法を取つて來た。然し夫等二つの方法の底には後者の方に重點があり、理論的にそれを掘り下げて行くといふのが經濟學の今後の行く可き途である。

何故ならば、第一の立場——現象の計量といふ立場は、何等ポリティカルなものを持つて居ないと言ひつゝ、實はその底に或ポリティカルなものを豫定し、その上で分析が行はれて居たといふこと。更に社會性乃至社會的意義を追及して行かなければ單純に數量的研究に了つて、その社會科學的の意味がハッキリ出て來ない。この意味

に於て此立場の反省が必要であり、之によつて經濟學は一つのものになつて行く、或は一つの共通の地盤で考へるといふ可能性が生れて來ると言ふ事が出来る。

(社會的立場の反省)

他方第二の立場——社會性の追及の立場に就てはかういふ事が出来る。現在迄の社會主義的經濟學の強さは、結局客觀的分析といふ地盤があつたといふ事である。然し此様な客觀的地盤の上にその理論が完成して居るかと言へばさうは言へない。マルクスにしても何にしても、今迄は數量的な研究迄には展開されて居ない。此觀點に立つ場合に伴ふ一つの缺點は、何と言つても社會的と言ふ觀點自體に引つ張られて客觀的事實の分析を逃して了ふといふ點にあると思ふ。だから此立場の經濟學としては、數量的分析を發達せしめて自らを補ふといふ事によつて理論的な基礎が固められる。

ゾムバルトがマルクスに就て次の様に述べて居る所がある。マルクスが資本主義經濟をあれだけ鋭敏に分析し得たのは、動機としては、資本主義經濟は歪められたものだと言ふに過ぎない。又労働者の利益といふ立場からは資本主義は破

壊しなければならぬといふ敵愾心を持つたからだらう。然し此敵愾心を其儘出さないで、之を大きく生かす爲に資本主義經濟を眺めてそれに徹したといふ所にマルクスの魅力がある。それは正に學問の客觀的立場の強さだと言つて居る。

此様な意味に於て社會的立場に立つ經濟學は客觀的事實の計量的分析を強く取入れるといふ反省がないと理論の強さが出て來ない。結局、第一の立場は社會的な觀點を反省しなければならぬし、同時にその研究の結果が第二の立場によつてもつと利用される。かうして二つのもの、基礎となつて居る理論的地盤が一つのものとして出來る機會が出て來ると思ふ。

#### ホ 理論概念の統一に就て

##### (概念の社會的制約)

方法論の立場から二つの經濟學の交渉を考へると、結局之等に共通な理論的地盤が出來上つて來るのではなからうか、又そのやうな胎動をうかゞふ事が出來るといふの

が大體懇談會の意見であつた。然し此所にもう一つの問題が残されて居る。理論概念の統一化といふ問題である。

經濟關係の計量化といふ場合、計量される量的要素は既に社會的制約をもつた經濟量である。之は自然科学に於ける計量の場合とは全く性質が違つて居る。今日では資本主義經濟といふ制約をもつた經濟量を取扱ふことになる。此場合に計量化された經濟關係といふものから、社會的制約のない、純經濟的な經濟關係を探し出すことが出来るか何うかといふ問題である。現在の世界で計量的に分析しようとするれば、どうしても實際の經濟、つまり資本主義經濟の内では現はれた計數的表現を使ふより外に方法がない。處がかういふ現代の經濟現象の中にある概念と、社會的意味を追及する立場に立つた時に使ふ概念とは屢々一致しない。これが問題になるわけである。

##### (概念も亦統一化の傾向にある)

然し現在の經濟學で使はれて居る概念も、少くとも計畫經濟等で使はれる概念に轉化するといふ事は考へられる。例へばマーシャルはナショナル・ディビデンド(國民所

得)といふ概念を使つて居たが、ケインズはインベストメントとセービング(投資と貯蓄)といふ概念を使つて居る。國民所得といふ概念を使つても投資と貯蓄といふ概念を使つても、之れによつて兩方とも同じものを分析して居る。處が國民所得ではその儘政策に結付かないが、投資と貯蓄といふ概念になると直ちに政策に、例へば利子政策とか金融政策とかに結付くことが出来る。これは明かに政策的な觀點を含んだ概念の轉化だといふ事が出来るのではないか。勿論之だけでは社會主義的經濟學の使つて來た概念と一つになるわけではない。然し此問題も經濟理論の政策化、即ち經濟學の計量化と社會性との統一が進むことになれば、概念の統一といふ事も亦進められると考へられる。

勿論資本主義的經濟學で使はれる概念が政策に結び付くやうに轉化したからと言つて、その事が直ちに社會的な立場になつたといふ事を意味するわけではない。然し少くとも、社會的立場を入れる餘地は非常に大きく開かれるといふ事は出来る。それがもう一步發展して行くと、そこで資本主義經濟理論と社會主義的經濟理論とに共通な

理論概念が出来上つて、一つの共通の地盤で討議するやうな場面が開かれると考へる。

## B 批判的態度の立場から

資本主義的經濟學も社會主義的經濟學も共に現在の經濟體制を批判するといふ立場を採つて居り、そこに經濟學が科學としての強みを持つて來るのである。此様な批判的立場の交渉から、二つの經濟學が統一される可能性があるだらうかゞ次の問題として擇ばれる。

### 1 共通の地盤としての科學性と連續性

#### イ 批判性と科學性

(何れの經濟學も批判的である)

資本主義的經濟學と社會主義的經濟學との最も大きい相違は、後者が現在の制度に

對して批判的な點にあるといふ考方は正しいと思ふ。然し資本主義的と言はれる古典學派を中心とする經濟學もその成立當時はやはり批判的であつた。資本主義的經濟學に於ける批判的精神はリカード迄の事で其後は寧ろ現存の經濟體制の擁護に向けられて居るといふ批評もある。然し少くとも歴史的には、二つの經濟學は何れも現存の經濟體制の實踐的批判から生れたといふ點に於て共通であるといふ事が出来る。

(批判的なるが故に科學的である)

然し批判的なものであつたとしても、何か心情的なもの、ロマンティックなものである限りは學問としての強みは出て來ない。資本主義が出て來た場合、元の封建制度とか中世紀的な色々な體制を批判するとき、それが強い批判になり得たのは一つの科學といふ體系をとり得たからである。此様に資本主義的經濟學が科學性を獲得し得たのは、それが批判的である限りに於てである。それが若し現在批判性を失ふとすれば、それは同時に科學性を失ふだらう。事實現在資本主義的經濟學と言はれてゐるものも批判的なるものを充分持つて居る。例へばビグーにしても最近のハンセンにして

も、もし現存の經濟體制を大體に於てゞも完全なものとして見るとすれば、あの様な經濟學は出て來ないだらう。やはり之に對して批判的なものを持つて居る處に古典學派の傳統を受繼いで行く事が出来ると思ふ。マルクス經濟學も同様であつて、資本主義經濟が或程度成熟して來た時に、それに對する批判として、やはり科學的立場を採つて現れて來た所にその強味があり、又充分理由のある事である。

かういふ風に考へると二つの經濟學の根本になつて居る所の科學性といふものには一つの共通の要素を認める事が出来るのではないか。此意味に於て、經濟學といふ學問自體を通じて流れてゐる一つの人間の意識の合理性の促進過程といふやうなものである。さうすると、一つの時代に併存してゐて相互に融和し得ないやうなエレメントを持つてゐるかの如くに見え乍ら、而も科學として取上げて行くといふ點で共通のものも考へる事が出来る。つまり理論の共通性といふやうなものを考へる事が出来るのはなからうか。

二つの經濟學には、以上の様に科學性の追及といふ所に共通性を認めると共に、同時にそこに一つの連続性があるといふ點を重視しなければならぬ。封建主義に對して資本主義が出て來た場合に、その批判として生れた資本主義的經濟學の科學性と、その後資本主義の批判として生れて來た社會主義的經濟學の科學性との間には連続性があるといふ問題である。勿論社會主義的經濟學には、資本主義的經濟學には見出せない新しい、違つた要素があり、それがあからこ別の經濟學が成り立つのである。そこで新しく入つて來た之等の要素に重點を置いて見れば二つは全く違つた性質の經濟學となる。それではその違つた性質の問題をどういふ風に取扱ふか。此所に經濟學に於ける科學性の連続性といふものが見出される。

此場合、科學性といふ言葉の内には、經濟現象を掴む技術或は經濟現象を掴んで理解して行く武器といふ意味も含まれて居る。此意味の科學性の連続性を認める事が出来る。資本主義的經濟學に於て建てられた所謂經濟法則なる此様な武器は總て社會主義的經濟學が繼承し、寧ろそれを基礎としてゐる。かうしてマルクス經濟學は古典經

濟學がなければ到底不可能であつたと思はれる様な基礎を充分持つて居るわけである。之れは二つの經濟學を對立させて見る場合には、殆んど無視され勝ではあるが、之等二つの間には明かに連続性が認められねばならない。

此所にも、社會主義的經濟學の底にある理論と、資本主義的經濟學の理論との間に少くとも共通の地盤で話すことの出来るやうな、一種の歩みよりの可能性があるのではないか。

## 2 技術的(理論的)批判と歴史的批判との交渉

### イ 二つの批判的態度

此處で一つの疑問を提出して問題を一步進める事にする。ピグーやケインズが現在の自由資本主義經濟の缺陷を指摘して批判して居る。此場合の批判と、社會主義經濟學がやはり現在の經濟體制を批判する場合の批判と何處が違ふかといふ問題である。之に對しては次の様な答を得る。

一つは技術的乃至理論的批判であり、他の一つは歴史的であると言ふ事が出来る。ピグーとかケインズの批判は前者であり、經濟社會が歴史的法則性を持つて居るといふ認識がない。之れに對して社會主義的經濟學の場合は寧ろそれが前面に出て居り、技術の問題を超えた制度的な批判である。此意味からは歴史的批判といふ事が出来る。

勿論ケインズに歴史的感覚がないといふものではない。彼が歴史的な多くの資料を蒐集して巧みに自らの理論の中に押込んでゐる事を否定するわけではない。シユムペーターが非常に多くのデータを集めて理論を作り上げてゐるのと同じだ。然しこれはケインズやシユムペーターが資本主義經濟の歴史性の認識の上に立つて居ることを意味しないであらう。

そこで問題は之等二つの批判的態度、技術的批判と歴史的批判との間に交渉はないかといふ問題である。懇談會では、之等二つの間に交渉があるといふ事が認められたのであるが、唯その交渉の仕方に就て意見は二つに別れて居る。一つは総合としての

交渉であり、他の一つは繼受としての交渉である。

#### ロ 総合としての交渉

資本主義經濟、修正資本主義乃至計畫經濟、社會主義經濟を通じて、經濟學が一つの科學として出来上つて居るといふ事は、同時に此二つの批判態度の間に或程度の交渉があるといふ事を示して居る。もし之等の間に何等の交渉がなく、全然無關係であるとすれば、恐らく科學としての經濟學は命あるよりもつと違つた形であつたに違ない。

今日の經濟學は效用函數の統計的確定といふやうな所から入つて、所得なり、賃銀なり雇傭なりの數字を蒐めて、一つの經濟社會を作り上げる所迄來て居る。之は始んど技術の問題である。處が此技術の問題が、今度はその經濟社會を考へる立場の上に大きい影響がある。例へば、自由資本主義のまだ初期の時代、國民所得の確定も出来なければ雇傭の計算も出来ないといふやうな條件の下では、計畫經濟の可能性等とい



ふ問題は解決がつかない。處が此様な技術的手段が確立されて來れば、——尤も今日の状態ではまだ問題にならないが——少くとも或可能性が出て來る。かういふにして、數字の方から計畫經濟の可能性が出て來るといふ事になると、その事が今度は計畫經濟に持つて行かうとする立場からの自由資本主義に對する批判に一つの根據を與へる。此所に技術的批判と歴史的批判との内面的な、綜合としての交渉が認められるわけである。

これは相當に重視すべき問題である。例へばマルクスが資本主義に於ける勞働の地位を不當だと考へ、資本主義批判をやらうとする。その場合、もしリカード等の資本主義の分析の道具が揃つて居なかつたら、現にマルクスのした程の分析は出來なかつたに違ない。同じやうな意味で今後出て來る批判的立場が社會主義的計畫經濟であるとするれば、今日の理論的統計的分析の成果なしには、その理論を積極的に築き上げて行く事は出來ないだらう。

かう考へると技術的批判と歴史的批判とは、どちらの側について見ても一つの共通

の問題を持つて居るのであり、交渉がある。勿論今日の實情としては、技術的分析を重視する方では歴史的批判が後退し、反對に歴史的批判を重んずる方では技術的批判が後退するといふ危険性が充分にある。今後の經濟學の行く可き方向としては、相互に各々の特徴を認めながら、相互に相交渉する部面を認めるといふ所にあるのではないか。

#### ハ 繼受としての交渉

此様な綜合としての交渉に對して、繼受としての交渉だとする考方から次の様に述べられる。

以上の様な交渉が二つの立場の批判の間に存在するといふ事は充分理解出來る。處で、その事は技術的批判の立場が歴史的批判の立場に接近して居る事を少しも意味して居るわけではない。寧ろ技術的操作が今日既に完璧と謂はれる程に迄精密化して居る所から、社會主義的經濟理論の歴史批判の立場に素材を提供してゐるのではない

か。之によつて歴史的な立場の内容を豊富にし、一層強固にし且つ實踐的適用の可能性を高めるのではないか。此意味に於て交渉するといへば正に交渉するに違ない。然し一方の場合は技術的操作が比較的濃厚で、他方の場合は歴史的批判の態度が比較的濃厚だといふ様に、二つの態度の相對的程度の差といふ意味での歩みよりがあるものとは思へない。相違は依然として根本的なものがある。

此場合二つの批判的態度の關係は謂はゞ、繼受としての交渉である。資本主義經濟の枠の中で非常に精緻化された理論は社會主義的經濟學が實踐的な計畫經濟の理論となる爲には當然取つて以つて活用するといふ素材になる筈の關係である。

此關係は單に理論だけの問題ではない。例へば資本主義社會の生産力の發展といふ遺産を持たなければ社會主義的な計畫經濟の遂行は不可能だといふ關係にも具體化されて行くだらう。或は又資本主義社會内部で段々成熟して來る主體的な精神、例へば労働のエトスとも謂ふ可きものが湧き出て居なければ結局社會主義經濟建設の擔當者としての主體性が見出されない。此様に主體的なエトスの側面に於ても、資本主義か

ら出て來た結果を社會主義が繼受する。

しかし之は飽く迄も素材として生産力を繼受しエトスを繼受するのであり、繼受した受入體制そのものはまるで違つた足場に立ち、違つた理念を持つて居る。統制理論に於ても同様の事が云ひ得ると思ふ。だから交錯するといふ事は認めねばならないが、二つのものが建前上近寄つて來るものとは考へられない。

### C 階級の立場から

資本主義的經濟學と社會主義的經濟學との統一が可能であるかといふ問題を、第一は方法論第二に批判的態度の二つの立場から討論した結論は今迄解説した通りである。之によつて統一の可能、不可能の二つの立場は依然對立して居るのであるが、解説者の理解する限りでは、何等かの程度には意見の歩み寄りがあつたと考へられる。但しこの點は速記録と合せて解説を讀む人々の解釋に一任した方がよい。之等二つの

經濟學の統一性の問題をもう一つの立場、階級の立場から懇談にのせられた。此處では、此懇談會の限りでは、始んど考方の接近らしいものを示すことなく、最後迄對立の形に終つて居る。その内容を整理、解説する事にしよう。

### 1 無階級經濟學の可能性

資本主義的經濟學、社會主義的經濟學が夫々何等かの意味に於て階級的であるとするれば、經濟學なるものは、いつでも必ず階級的な形でしか成立し得ないものだらうか。或は階級を離れた純粹な經濟學、社會的制約のない經濟學はなり立たないものだらうか。之れが先づ此所で問題とされる。此問題は、あらゆる時代に妥當するやうな、或は現在二つの立場の統一された經濟學があり得るか何うかといふ事を、今迄論じられたのと別の視角から検討する事となるわけである。

#### イ 可能とする考方

(無階級社會に於ける無階級經濟學)

一つの社會に二つの階級が同時に存在するといふ場合は階級的な經濟學が成立するだらう。例へば現在の社會主義といふ立場は資本主義を前提とし、その批判として成立し、又現在の資本主義は、自らの中に生れる社會主義的傾向に對抗するものとして存在する。此のやうに何れの考方も夫々階級的な立場を持つものであるから此立場の上に成立する夫々の經濟學は當然に何れも階級的たらざるを得ない。之に反して、社會が完全に社會主義になり切つた場合、即ち全然階級的對立のない社會が出来るとした場合には、そこに成立する經濟學は當然に階級的ではないと考へることが出来る。

假りにソ聯といふやうな社會が勞働者だけの社會として出来るとする。實際上は、ソ聯には對外關係があるが、今之を問題外において、それが勞働者だけの社會主義社會になつた場合を考へて見る。そこに發生する經濟問題を取扱ふ經濟學は明かに階級經濟學ではない。つまり階級のない社會にも經濟問題がある限り經濟學はある。そして此經濟學は最早階級的立場がないのであるから無階級經濟學ではないか。

純粹な意味の社會主義社會に於ては、資本主義社會に起つて来るやうな失業問題とか所得の資本家、地主、労働者に對する配分問題とかいふやうな問題は起らないだらう。然し違つた形ではあるが、やはり此場合にも社會的な經濟問題は不斷に起つて来る。例へば生活の問題、労働の移動の問題、價格の問題、産業の立地の問題等多くの問題が発生するだらう。さうすれば此様な問題を解決する爲の經濟學は必要であり、現にソ聯にも存在して居るであらう。

(異質經濟學の内容よりの接近)

そこで此二つの經濟學、階級的社會の内に出来上つた資本主義的經濟學と無階級社會の内に出来上るだらう所の經濟學との間に繋りがなく、二つのものは無縁であるかどうか。經濟學はリカードが行止りでその後は唯臆説に過ぎないといふやうな考方もある。然し資本主義の中に発生した經濟學と、此様な社會主義の中に発生する經濟學とは非常に異つた經濟學ではあつても、相互に決して無縁のものではなく、經濟學としては前者から後者に向つて絶えず前進して行くものだと思へばならない。二つの

内容から見て質の異つた經濟學、資本主義的經濟學と社會主義的經濟學とが、資本主義經濟自體の内部に生れて来る。他方ソ聯の如き社會主義經濟が資本主義の技術を採用入れる。此様にして二つの經濟學が歩み寄つて来る。そしてそれが事實の上に現はれつゝあると見る事が出来るのではないか。勿論之等の結び付きは決して安易な途ではないし、互に背反する全く別の形をとるかも知れないが、それでも内容的には一方が他方に移る地盤を形成して居るものと見る事が出来る。

例へばベーム・バヴェルクの利子論を採つて考へて見る。彼の利子といふのは生産の迂回の程度を計るものである。生産様式の資本化が進歩して生産の迂回の程度が高くなる。利子はこの程度を計るものであるといふ事は一國の生産資源をどういふ風に使ふのが社會から見て一番有利かといふ問題に答へることである。此利子は社會的には純粹な形で出て来る筈であるが、資本主義經濟では純粹な利子といふものは出て来ない。此利子が社會關係によつて歪められ、所謂金を貸した場合とか預金した場合とかの現實の利子とか利息とかの所謂貨幣利子としてしか出て来ない。之は純粹の、べ

ムの言ふ利子ではない。後者は現在の資本主義下の統計を如何に使つても擱へる事が出来ないものである。

かう考へると資本主義的經濟學と言ふもの、内には、階級と運命を共にするといふ面即資本主義がなくなれば同時に自らもなくなるといふ面と（此場合には現實の貨幣利子の如き）があると共に、社會主義になつて初めて現れて來るやうな面（ベームの言ふ利子）とがある。此様にいつ迄も残る可きものと捨てられるものがある。然し之等二つのものがケインズの用ひたやうな總體概念によつて段々統一的に合意されて來て居る。それ許りではなく、現在現はれて居る貨幣利子の統計的研究を通じて純粹利子に接近しようとする努力もなされて居るし、その可能性もある。さうすると、資本主義と社會主義とを貫いて存在する利子といふ問題があり、之を取り出すことによつて、階級的な資本主義から無階級の社會主義に迄、持續的に發展して行く經濟學といふものが考へられるのではないか。此所に明かに資本主義的經濟學と社會主義的經濟學とに共通な地盤といふものが考へられる。

#### ロ 不可能であるといふ考方

無階級經濟學はあり得ると共に、現在の階級經濟學と社會主義の下に於ける無階級經濟學との間には常に繋りがある許りではなく、進んで之等二つの結び付への接近が見られる。かういふ上述の意見に對立する立場からは次の様に主張されて居る。

資本主義に於ても社會主義に於ても經濟問題があるといふ事から、此様な問題を取扱ふ經濟學が何れの社會にもあると言ふが、此場合經濟學といふ一つの言葉で言ひ現はされて居るものは全く別個のものであり、同じものを意味して居るのではない。何故ならば、資本主義の經濟問題と社會主義の經濟問題は、同じ經濟問題ではあつても性質が違ふからである。例へば何れの社會に於ても同じ食物を食ふとしても、その獲得の仕方が全然異り、又經濟上の技術は之れを資本主義經濟から取入れるとすれば兩方とも同じであるとしてもその社會的意味に於て全く異つて居る。此様に性質の異なる經濟問題を對象とする學問を、經濟學といふ一つの言葉で言ひ現はすことは正しくな

い。此意味に於て、所謂經濟學は資本主義社會に於てのみ、即ち階級經濟學としてのみあり得るものであり、階級のない社會にあつては、今日の意味に於ける經濟學はあり得ない。即ち無階級經濟學なるものは考へられないのではないか。

例へばソ聯に於ても失業乃至雇傭の問題が現れて来る。雇傭の問題としては一見同じ問題ではあるが、實はその性質も現れ方も違ふ。社會主義の場合は、問題が問題そのものとして純粹に現はれて来るのに對し、資本主義に於ては階級に於ける關係として、階級との關係なくしては考へられない問題として現はれて来る。

前の無階級經濟學可能論に掲げられたベーム・バヴェルクの利子に就ても同じやうに言ふ事が出来る。彼の純粹利子なるものは資本主義經濟に於ては現はれて來ないし、之と現實に現はれる貨幣利子との間には何等の關係もない。それは唯社會主義社會に於てのみ初めて純粹に現れて來る現象である。此様な利子の學說を資本主義といふ階級社會を前提として作り上げたのは一體何を理由とするものだらうか。恐らくこれは、利子は資本主義社會と社會主義社會とを貫いて存在するといふ意味を持つて居

るのであらう。處が彼が之によつて説明するのは、此様な純粹利子ではなくして、資本主義といふ階級經濟に現實に現れて來る貨幣利子である。之は利子の社會性の追及を忘れた態度であり、問題を回避して居るわけである。之は勿論利子の問題に限られる事ではなく、現在經濟現象の計量化を行つて居る經濟學者には、現在の現象は二つの經濟社會を貫いて流れるといふ考方がその底にあると思はれる。處が實は夫等の現象は唯資本主義といふ階級社會に於て、階級との關係に於てのみ現はれる現象だといふ意味に於て、問題の社會性を見失つて居ると云はねばならぬ。

## 2 社會的制約のない計量の可能性

同じ立場か、社會的制約のない計量が出来るか何うかといふ事が問題になる。此所にも同様に二つの意見の對立が見られた。

現在の經濟學に於て色々な數量的研究をする場合には先づ理論がなければならぬ。又出て來た結果が何を意味するかを解釋するにも理論が必要である。例へば、理

論の場合には純粹利子を考へて居る。處が計量するとなると此様な純粹利子は現はれて來ないのであるから、資本主義下の貨幣利子を計量するといふ事になる。此様な社會的制約のある計量しか出來ないといふ所から、純粹經濟學的な結論の生れて來る理由がない。之等の客觀的に擱まれた數字は總て一定の社會關係を前提としてのみ發生する數字である。それにも拘らず、社會關係から獨立した、純粹の計數として取扱ふといふ態度は、結局問題の回避である。云ひ換へれば、一定の社會關係を無條件に乃至無批判に前提とし、此社會關係の方には足を踏み入れないでよく、といふ意味に於て、更に云ひ換へれば現象の社會性を追及しないといふ意味に於て問題を逃れて居ると云はねばならぬ。

之れに、社會的制約のない計量の可能性があるといふ考方が對立する。例へば利子の問題にしても、純粹利子と貨幣利子とは、經濟學に於てはハッキリ區別されて居るし、前にも觸れた様に、貨幣利子の數字から純粹利子の計量に迫らうといふ試みがなされて居る。これは、純粹利子は根本にある利子である、貨幣利子は資本主義に於け

る現象としての利子だといふ風に考へられるからである。

別の例として貯蓄といふものを考へて見る。貯蓄は多くの社會的制約を持つて居る。之れを計量する事は貯蓄の定義の如何によつてきまるだらう。從來のやうに、貯蓄の動機を結び付けて、將來の消費財を増加する爲めに現在の消費を少くするとか、子孫の繁榮の爲に、或は預金利息を得る爲に消費を節するとか、いふ風に貯蓄を定義するとすれば、ロックフェラーは節欲して貯蓄したかといふ風な問題が出て來て結局それからは客觀的な數字は出て來ない。處が之を總體概念によつて、現實に一ヶ年間に生産されたものゝ中で消費されなかつたものが貯蓄だと定義すると、一ヶ年間の貯蓄の計量はハッキリ出て來る。此意味の貯蓄の量は資本主義でも社會主義でも、客觀的計數として擱むことが出來るのではないか。

計數の客觀性に關する之等二つの對立する立場は、無階級經濟學の可能性に就ての二つの立場に對應するといふ事は説明する迄もない。

## VI 經濟學と倫理

社會科學の窮局の目的は、人類の幸福を高めるといふ事にある。勿論かういふ場合にも既に澤山の問題があり、一體人類の幸福といふのは何であるか、それを高めるといふ事は何の意味かといふ様な事。その意味を、所謂經濟的厚生に限定して、吾々が物質的に豊富な消費をなし得ることに限定したとしても、消費が不平等である場合と平等である場合と、果して何れが、如何なる意味に於てより幸福であるか、個人の幸福の高さを目標にするのか、社會的乃至團體的厚生といふやうな事を目標にするのか。この様に幸福といふ言葉に何ういふ意味を持たせるかに就ては色々な意見が對立するわけである。然し何れの立場をとるにしても經濟學の最後の目的は、何等かの意味に於て人類をより一層幸福にするといふ所にある。生産力を高めるとか、經濟が安定する、發展する、或は失業をなくする。總て人類の幸福といふ問題である。

この意味から云へば倫理と無關係な經濟學といふものは本來考へる事は出来ないだらう。然し之等の關係をもう少し狭く限定して、經濟學そのものと倫理との交渉といふ事を考へて見ると、必ずしも明かではない。アダム・スミスの場合を採つて見ると、自愛心を自由に發動せしめる事によつて社會的調和が出來上つて來るといふ、所謂功利主義的倫理觀がスミス經濟學の背柱をなして居るといふ風に、經濟學と倫理とは內的に密接な交渉を持つて居る。處が十九世紀後半以後段々發展して來た經濟理論は、少くともその理論の形成に於ては倫理的な要素を拂拭するといふ傾向があつた。之は經濟を純自然的な過程と考へ、そのやうな過程を純粹に科學的に分析する事によつて現象説明の統一原理を與へる。そこに經濟學としての性格があり、任務があると考へられるやうになつたからである。

それでは將來、之等二つのものゝ交渉は何うなるだらうか。依然として經濟學そのものは一應倫理から無關係に成立するものとして續いて行くだらうか。或は倫理が、もう一度、何等かの形で經濟學と密接な關係をもつやうになるものだらうか。之が懇



談會の最後のテーマとして與へられた問題である。

二七二

### 1 資本主義に於けるヒューマニティー

#### イ 資本主義のブレーキとしてのモラル

資本主義が段々高度に發展するに従つて、少くともその資本主義國に於ては、そして少くとも形に現れた所では倫理的要素が強くなつて居る。つまり資本主義特有のヒューマニティーなるものが強く出て來る傾向がある。個々の企業としては、無視しようとするれば自由に無視する事が出来るにも拘らず、或るモラルをまもつて行くやうになる。例へば個々の企業としては、不況期とか大きい激變期に、採算から云へば當然大量解雇をしなければならぬし、解雇する自由をも持つて居るに拘らず、實際には之をやらぬで當面必要としない大量労働を雇入れたまゝにおくといふ例が少くない。もう一つの例としては、企業の厚生費（ウエルフェア・コスト）は、他の種類のコスト、マテリアル・コストとかマシン・コストとかに比較すると、その上り方が急速

であり、大體物價騰貴に比例的に上昇して居るといふやうな事も擧げられる。

此様に實際の企業經營から見ると、資本主義には資本主義特有の形でのヒューマニティーが段々強くなつて來たといふ事は認めねばならぬ。之れが資本家の行動を抑制し、資本主義に一つのブレーキとしての作用をなして居るのである。此傾向は日本の實際に於ても、經營統計の實數にハッキリ現はれて居るのであるが、此事は日本の資本主義が段々成長して、漸く世界的の水準に迄到達したといふ現はれとも考へられるし、或は段々弱體化の段階に入つて來た徴候と考へる事も出来るだらう。

例へばマーシャルが「經濟騎士道の社會的可能性」といふ書物でかういふ風に述べて居る。イギリスの產業界は國民の厚生のため大いに努力する必要がある。イギリスは十九世紀以來、世界の各地から經濟力を集めて富の集中をなしてきて來た。即ちイギリスの繁榮なるものは、此の様に世界から集めた經濟的餘力の上に立つて居るのであるから、國民の厚生に努力するといふ事は吾々には可能な問題である許りではなく、更に吾々の義務でもある。

二七三

マーシャル自身が上述の様に述べて居る處からでも明かであるやうに、英本國のウエルフェアといふものは、イギリスの背後にある印度、南阿、その他多くの屬領があつて初めて成り立ち得るのである。さうすると世界全體の計數をとつて見て、果してウエルフェア・コストが上昇して居るかどうかといふ事は疑問で、資本主義國の個々の經營面に現はれた傾向だけで判斷することは出来ない。かう考へて來ると、近年の經營統計に示されるウエルフェア・コストの上昇といふ現象は、資本主義が段々發展して來るに伴つて、他面之を自制しなければならなくなるといふ矛盾の表現と見る事が出来るわけで、此現實面に關する限り、それは資本主義國に限定されたヒューマニティー、人間を解放するといふ意味をまだ持たないヒューマニティーと云はねばならぬ。

もう一つの例を挙げると、ビヅアリッチの失業に關する思想がある。彼は最初失業の救済は結局産業の救済であり、イギリスの失業を救済するといふ事はイギリスの産業の救済を前提にし、又産業を救ふといふ効果もある。かういふ立場を採つて居たの

であるが、その後彼の思想には一つの大きい變化が起つて來て、一種の道義の問題が入り込んで來たやうに感じられる。完全雇傭の問題は、産業の問題といふよりも寧ろ國民經濟のモラルの問題だといふ調子が大部強くなつて來たやうな印象を受ける。

此様な彼の思想の變化は、やはりイギリス資本主義の矛盾乃至弱體化を地盤とするものゝやうである。最近の戦争によつて此行詰りが益々ひどくなつて來た。植民地への投資は失つたし、外債は増加して居る。又労働者階級の政治力と組織力が非常に強くなつた。此様な現實の力に押されて、從來唯頭の中に描いてだけ居た理念を現實政策に具體化する必要に迫られた。此様な切羽詰つた状態に追込まれたといふのが、彼の思想の變化した現實的地盤ではないだらうか。その地盤、イギリス資本主義の弱體化の上に、完全雇傭の解決にはモラルの色彩を強くせざるを得なくなつたのではないか。

以上の様に考へると、資本主義にもモラルの要素が段々強くなつて來たといふ事は、資本主義自體の矛盾の表現だと解釋して差支ない。云ひ換へれば、之によつて自

らを抑制しなければ資本主義を持ちこたへて行く事が出来ないといふ段階に到達したといふ事になる。此同じ事情が、かく老成した資本主義國をして他面色々な反倫理的政策を採らざるを得ないやうにもする。老成資本主義の倫理的二重性格である。イギリスが資本主義國として存続し、その體制を維持し、本國のウエルフェアを或る水準に維持しようとするれば、本國の周圍にある植民地に於て時には反倫理的な政策を實行する必要があるからである。

此所に老成資本主義イギリスと新興アメリカとの大きい相違が現はれて居る。イギリスの謂はゞ貿易資本主義に對してアメリカ資本主義は、資本主義としての繁榮を維持し完全雇傭の状態を實現する爲には、イギリスとは逆に植民地の購買力を増大して市場を擴大して行く。それによつてアメリカの産業を延して行く。東亞市場に對する考方も同じやうに、イギリス的なものとアメリカ的なものとは違つて居るのであり、後者が資本主義として尙充分發展の餘地のある事を示して居るわけである。

## 2 人間的立場の展開

前にも述べた様に、經濟學は常に現存の經濟體制を批判するといふ性質を持つて居る。此批判が階級的な立場からなされるものもあれば（例へば資本主義的經濟學の様に）、或は階級を超え、國を超えた人間的立場（例へば純粹經濟學、或は純粹社會主義經濟學の様に）からされるものもあり得る。前者は人間の特定部分の利益を立場とするのに對して、後者は人間全體の利益、ヒューマニティーを立場とするものである。過去の經濟學を通じて之を見ると、此意味の人間の立場が一應展開して來たと見る事が出来るのであるが、尙そこには多くの問題を殘して居ると見て差支ない。

之をイギリスの經濟學の歴史に就て見ると、アダム・スミスにしてもリカードにしても、意識的にせよ無意識的にせよ人間的立場を採つて居たといふ事が出来る。處が此場合の人間的立場といふのは、實は封建制度の中から新しく起つて來た第三階級、新しい資本家、産業家階級の立場、それもイギリスのその階級の立場を代表してゐたのであり、此階級の解放が人間の解放と考へられたわけである。處が此階級の解放が完成された時分には、従前の人間的立場が失はれて之等第三階級を擁護するといふ立

場に變つて了つた。此所に歴史的批判としての立場が失はれたわけである。

此様な過程を経て進んだ資本主義經濟學は、再び人間的立場を取り戻さうとしてゐる。之れをケインズの思想の變化に見ると可なり明瞭に看取する事が出来る。『一般理論』迄の彼の考方は、雇傭問題をイギリスの問題として考へた。處がその後の彼の思想は、之をイギリスの問題に局限しないで、それを世界の問題、人間一般の問題として考へるやうになつた様である。此様な人間的立場は、イギリスの資本主義の行詰りから、完全雇傭の問題は改めて人間的立場に立返つて、曾つてのスミスがしたやうに廣い立場に於て考へる必要がある、そしてもう一度逆にイギリスの立場に戻つて行くといふ第二回目の構想とも考へられる。或は又、完全雇傭の問題はイギリスだけの力では解決されない事になつた、そこで問題を全世界の立場に於て考へざるを得ない事になり、此處に再び人間的立場の展開を見るに至つたとも考へられる。

此様にケインズに人間的立場の展開が見られるやうになつたのであるが、さて此場合の人間的立場といふ事の意味が問題である。大體ケインズの立脚する人間の立場と

いふのは、現在のイギリスばかりではなく、ヨーロッパ各國、アメリカ、特にソ聯等一切を含めた現在の世界經濟の枠の内での全體の立場、社會主義國、資本主義國、後進の農業國、之等全體を含めるといふ意味での全體の立場である。之等全體が相寄つて協力しなければ、イギリス自身の完全雇傭も達成出来ない。世界の通貨安定も貿易の發展も不可能だ。此様に人間の立場といふものを現在あるが儘の状態に於て捉へるわけである。

之に對して社會主義が人間の立場をとるといふ場合は、社會主義的世界革命を通ずる事によつて初めて可能だと考へる。人間を現在の社會關係から解放する、資本から解放するといふ意味に於て、ヒューマニズムが政治に具體化されるのは社會主義の外にはないからである。或は又、社會主義は生産力の原理に立つ體制であり、それによらなければ生産力の眞の發展は不可能であり、この生産力の發展こそが人間解放の唯一の途であるから、とも主張される。

かうしてケインズに代表される資本主義的經濟學は現在あるが儘の世界に於て人間

の立場を採らうとし、社會主義的經濟學は經濟體制の世界的再編によつて人間の立場を可能ならしめようとする。此點二つの經濟學は相對立するのであるが、かく異つた觀點からではあるが、經濟學がヒュマニティーの色彩を濃くしつゝあるといふ事に於ては共通だと謂ひ得るのではないか。

經濟學の將來

定價金貳拾圓

昭和二十一年十一月一日印刷  
昭和二十一年十一月十五日發行

編纂

東京都神田區駿河台三ノ七  
東京經濟學研究所

發行者

東京都神田區駿河台三ノ七  
合資會社廣文社  
代表社員 岩瀨利吉

印刷者

東京都王子區神谷町一ノ六一ノ一  
大洋印刷産業株式會社  
原田憲次郎

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九  
日本出版配給株式會社



發行所

東京都神田區駿河台三ノ七  
廣文社

電話 神田(25)三〇二二番  
振替東京一一四八六八番  
會員番號 A一一〇二七番

983  
233

年

月

品 臣 士 監 許 司 司 司 口 7 6

關二	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六
關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六
關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六	關六

關  
監  
許  
司



¥.20.00

東京・博田  
文庫刊行

終

